

## 史料紹介 「大和家蔵書」所収

### 「大和大和守晴完入道宗恕筆記」

木下 聡

#### はじめに

「大和家蔵書」とは、現在山口県図書館所蔵の写本で、室町幕府奉公衆にして、故実家・医者・謡手として知られる大和晴完入道宗恕の書き記したものである。現在の所蔵に至るまでの経歴は不明ではあるが、晴完の子孫は萩藩毛利氏に仕えているので、その子孫が伝えたものが、後に図書館に入ったのであろう。

「大和家蔵書」は全十二巻で構成されている、大和晴完が書き留めた武家故実を記した書である。十二巻の内訳は、第一～五巻が「大館伊予守尚氏入道常興筆記」大和大和守晴完入道宗恕追加」五冊、第六～七巻が「伊勢下総守貞頼入道宗五筆記」二冊、第八巻が「大館陸奥守晴光筆記 大和大和守晴完追加」一冊、第九～十一巻が「大和大和守晴完入道宗恕筆記」三冊、第十二巻「安富勘解由左衛門尉筆記」一冊である。このうち「伊勢下総守貞頼入道宗五筆記」とは、『群書類

従』に所収されている「宗五大草紙」、そして「安富勘解由左衛門尉筆記」は、これも同じく『群書類従』所収の「細川家書札抄」のことである。

この「大和家蔵書」は従来幾つかの論文に引用され、一部翻刻もされてはいるが、その全容は明らかにされてきていない。しかし「大和家蔵書」は、武家故実研究をする上でも重要な内容を含んでいると思われる。ただし本文は膨大な量となり、紙幅の関係もあるので、本稿ではそのうちの「大和大和守晴完入道宗恕筆記」三冊分を翻刻紹介することとする。その他の巻は、「伊勢下総守貞頼入道宗五筆記」及び「安富勘解由左衛門尉筆記」は、すでに『群書類従』で別写本が翻刻されているため、残る大館常興・晴光父子から晴完が得た故実書は、後日改めて機会を得た時に翻刻紹介をしたい。

記主の大和晴完については、以前大和氏の系譜と共にその動向を明らかにしている<sup>(1)</sup>ので、詳細はそちらに譲り、ここでは簡単に経歴を紹介する。大和晴完は、室町幕府奉公衆四番衆大和元綱の子で、『言経

『卿記』慶長九年（一六〇四）正月十一日条に死去したことが見え、百六歳か、とあるので、逆算して明応八年生まれとなる。幕府内では当初走衆、後に申次を務め、大和氏の家職である、將軍への御護伝授も行っている。永禄八年（一五六五）の將軍足利義輝死後は政治から離れ、主に故実家・医者として活動している。「大和家藏書」や「条々聞書」<sup>3</sup>）に見える晴完の故実は、幕府申次を務める際に集めたもので、大和氏では申次を輩出したことはあったものの、晴完の父祖は務めたことが無かったため、申次をする上で必要な故実を新たに集めたことで集積されたものであった。

本稿で紹介する「大和守晴完入道宗恕筆記」三冊の内容は、それぞれ以下の通りである。

一冊目は系図（飛鳥井・伊勢・斯波など）や様々な用語、元号とその年代、書札礼、十句五韻、寛正頃の国持衆・外様衆・御供衆などを書き連ねた「寛正年中記録」、公家の家格、將軍側近としての様々な心得を記す「藤大納言入道へ藤長被尋申返答」、將軍から出す文書の宛所についての「御下知宛所等条々」などで構成されている。

二冊目は、具足・鞍・弓矢など諸道具について、式三献や進物の際の挙措振る舞い、勅書などで構成されている。

そして三冊目は、進物の目録の書き方などを記す「諸家へ目録可調様之事」、物を贈る時・受け取る時の仕方や書札など様々な事柄について記す「雑々」、大館晴光が細川氏から尋ねられたことへの返答、制札など文書の書き方、書札礼、婚礼、大和国侍次第などで構成されている。

最後になるが、翻刻の許可を戴いた山口県図書館に御礼を述べさせていただきます。

## 註

（1）例えば設楽薫「大館常興略伝―將軍義晴の登場まで―」（桑山浩然研究代表科研報告書『室町幕府関係引付史料の研究』一九八九年）や、拙稿「室町幕府外様衆の基礎的研究」（『東京大学日本史学研究室紀要』十五号、二〇一一年）などで部分的に引用されている。

（2）拙稿「大和晴完とその故実について」（天野忠幸・片山正彦・古野貢・渡邊大門編『戦国・織豊期の西国社会』日本史料研究會、二〇一二年）。なお晴完については、ほかに伊藤正義「大和宗恕小伝」（『論集日本文学・日本語 3 中世』角川書店、一九七八年）、古川元也「故実家大和宗恕管見」（『年報三田中世史研究』三号、一九九六年）などがある。

（3）蓬左文庫所蔵。これについては前注2拙稿参照。

〔付記〕本稿は二〇一六年度科学研究費補助金（若手研究スタートアップ）による研究成果の一部である。

## 〈凡例〉

- ・翻刻にあたって、旧字体は適宜現在通用の字体に改めた。
- ・改行は原則として追い込みとし、傍書・挿入箇所も適宜本文中に追い込みとした。改頁や行間が空いている場合は、一行空けた。また読点および並列点を適宜加えた。
- ・闕字は適宜存した。
- ・系図の関係線は本来朱であるが、印刷の関係上黒で表記した。

大和家藏書九

〔表紙表題〕「大和家藏書 九」

中表紙

〔付箋〕「大和守晴完入道宗恕筆記 一」

〔朱印〕「明治十四年改」

〔朱印〕「明倫館藏」〔朱印〕「安政七改」

九条太閤仰

一青侍 侍の惣名也、布衣の侍也、あをきかのきぬのを」着故也、

同

一撰家の諸大夫ハ刀をさす、清花の諸大夫ハ刀をさす」是かハリ也、

同

一七文字を、七才までハ親に、ミやつかい已後主へ奉公をする、

右中將 少將 為定卿母

教雅 兼教 女子

為氏妻

飛鳥井参議

左兵衛督 参議 権中納言 右兵衛督

雅経 教定 雅有 雅孝 雅家

二条トモ云新古今撰者五人内

権中納言 権中納言法名祐雅 大納言 大納言

雅縁 雅世 雅親 雅俊

法名宋雅 新統古今 法名栄雅蓮心院 清雲院

権中納言

雅永 雅康 頼孝

法名宋世号二乗院

雅藤

一位大納言 大納言 中將 改雅枝

雅綱 雅教 雅敦 雅継

知光院香雅

兼家卿息 冷泉家

道長

御堂関白

正三位 和哥基俊第二号五条 三位母敦家朝臣女 号京極黄門

権大納言正二 権中納言 権中納言 皇太后宮 権中納言

長家 忠家 俊忠 俊成 定家

号御子左

大夫 新古今新勅撰統古

撰千載集 統後撰法名明静

法名釈阿

権大納言号中院

為家

法名融覚鞠足

為守法名暁月

慶融

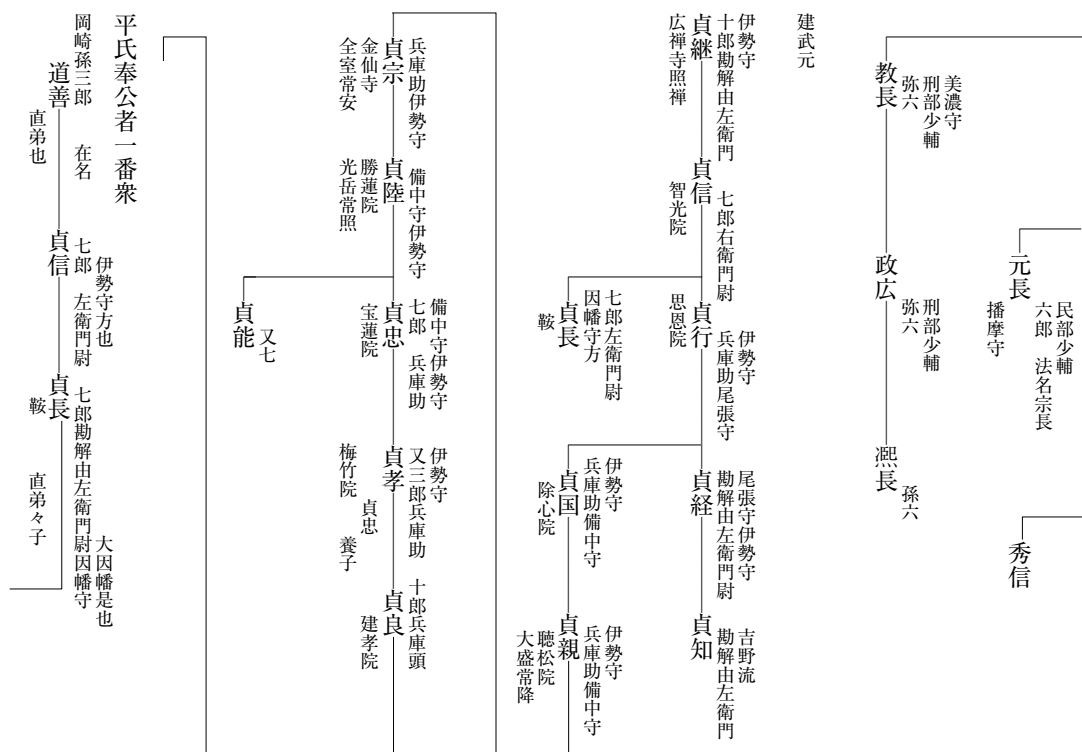
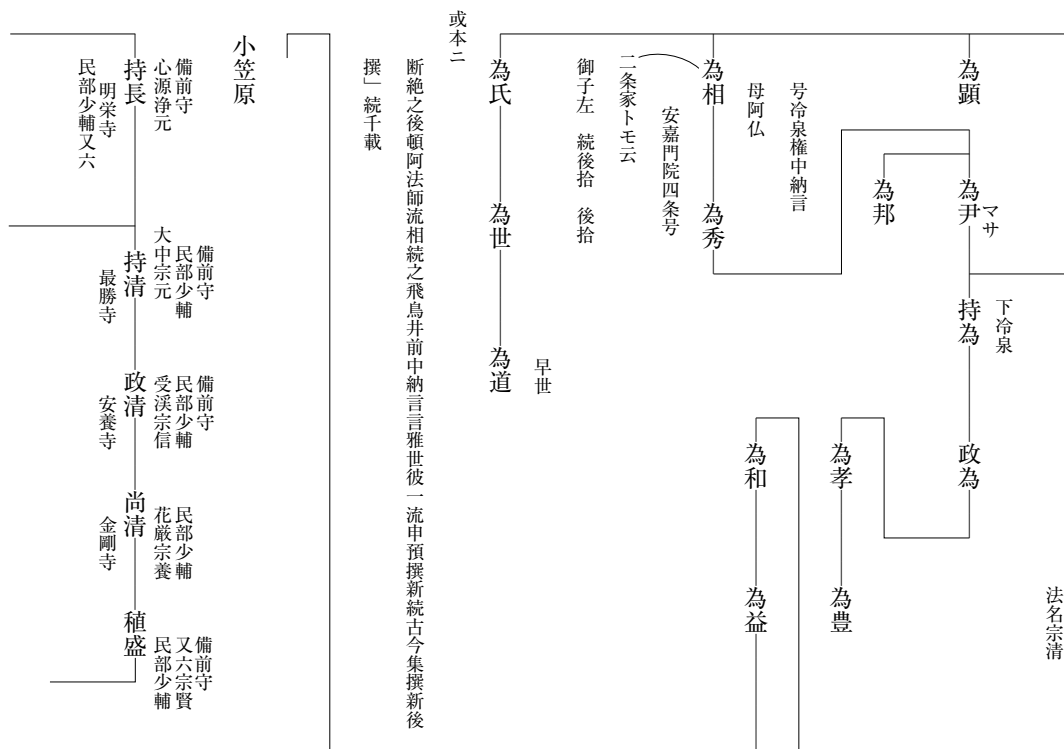
源承

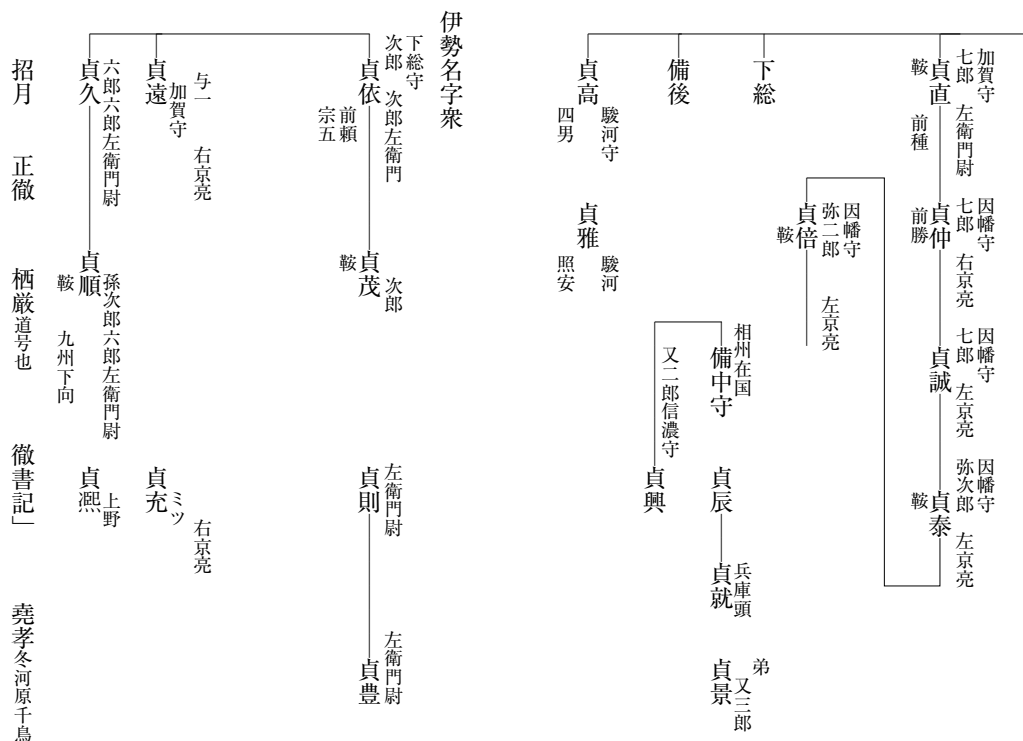
為盛

為之

為富

為広





比叡山延曆寺山門十六谷、合三塔云、東塔西塔横川是也、

東塔南谷 東塔東谷―北谷 東―仏頂尾」東塔西谷 無動寺」

西塔北谷―東谷―南尾―南谷―北尾

横川 樺尾 般若谷 解脱 都率 戒心

楞嚴院ト云 飯室

日本画工

金岡仏像 龍湫不動 尊―地藏 玉腕和尚蘭」玉阿観音 新豪鷲

岳林芦雁 玉首座観音」伴集院馬形 俊兄大黒 文都官山水人形

等源花鳥」宗丹山水人形

醍醐天皇六十代 元龜三年至壬申如此 六百廿九年

延長元年癸未 大唐惟時卿渡三月七日

朱雀天皇六十一代 六百廿二年七月

承平元年辛卯 帰朝

後冷泉院七十代 五百廿七年

天喜康平比貞任御退治 八幡殿

白河院七十二代 五百年

承暦二年戊午五月五日 八幡殿江伝匡房卿

若州武田代々

長福寺天游光芸信栄

栖雲寺礼部侍郎对岳宗鉄信親

仏国寺従三品大雄紹壮光信

靈雲院大セシ紹真信豊

大通寺奥州大人宗武信賢

玉華院光禄功林宗勲国信

発心寺従四位下大源宗勝 元光

桂林寺光禄聖叔宗清義統

元次孫八郎法名宗貞

天台祖師

南覺天台 正案 妙楽 慈恵 慈覚 伝教 智澄

真言祖師

大日金剛薩埵 龍猛 龍智 善無畏 一行 恵果 弘法

關東五山

巨福山 建長寺 瑞鹿山 円覚寺 亀谷山 寿福寺 金峰山  
浄智寺 稲荷山 浄妙寺

京五山 五岳トハ五山ヲ云

天龍寺 靈龜山 相国寺 万年山 建仁寺 東山 東福寺 恵  
日山 万寿寺 依為九重 南禅寺 瑞龍山 五山之上  
平城山イ京城山 ケイシヤウ

天竺三山

祇園精舎 竹林精舎 大林精舎 誓多林寺 那蘭陀寺

震旦五山

天海寺 五山之上 径山寺 育王寺 天童寺 靈隠寺 浄慈寺

タ、ユル ヒソム ハカル カンナキ エヒス  
湛 水 嘸 眉 測 神慮 巫 戎 是ヲ用

一貞観ハ清和ノ御門ノ御事也、

一平城天皇 奈良御門ト申也、文武天皇ト申也

一字多天皇 寛平法皇也

一葛原親王 九条殿入道御所被仰し也

主上御官也

一太上天皇 院にならせ給ひ天下の儀を兼帶有時申也  
御位を御すへり有て申也

一同太上法皇 同 シヤウクワウ 院ノ御カラ  
とハ御法躰の御時法皇申也 上皇共申 也名也

一太皇太后宮 帝王祖母也 皇太后宮 帝王御母 皇后宮 帝王妻也

一中宮 帝王后御官也 四宮申 春宮

一伊勢斎宮 王の御子を伊勢へまいらせらるゝきさきの御心なり、

一賀茂斎院 同かもへ御ミやつかいの心也、

一女御 八十一人有之、禁中内の事を聞給ふ也、

一更衣 八十一人、禁中外を聞、

一竹園 与 申ハ親王の御事也、

ナマキンタチ

一きんたち 摂家・清花若公を申也、

一なまのきんたち、近内裏へ御参候を申、

一斎宮女御 大神宮へ后を王より被参也、皇子也、

天子御ヤスミ所 ハ御服を召カユル所

一御息所とハ、更衣などの皇子を生給て御息所と申也、

一内大臣・中納言かすの外の官と申也、令ノ外・令外ノ官ト申也、

一儀同三司とハ内大臣と大納言の間の官也

一殿上人とハ、四位・五位・六位ヲ申也、

一禁中にてハ、五位職事と申、頭弁とハ貫首也、四品也

一上達部とハ、大臣家・大中納言家までを申也、

一院の御座候時ハ、北面と云へし、院無御座時ハ、親王・大臣家へ

付也、其時ハ令と云也、

一仁和寺殿ハ法務と申也、此門跡にかきりての事也、綱所<sup>カウ</sup>の衆ハ侍

と同前也、余の門跡ハかう所の衆ハ侍より以下也、

一公家達召つかはる、侍ハ格勤と云也、随分衆也、

一 攝家衆発軀の時、太閤と申ハ、御子ニ関白を御持候時ハ」太閤と申也、只ハ禪閣と可申也、

一 三公と申ハ、右大臣・左大臣・太政大臣の事也、

一 帝王ハ年に三度の行幸御座あり、御父王へ年頭の」行幸、七月御いきミたまの行幸、是を朝覲の行幸と」申也、野の行幸、是ハ田地のていを御らんせらるゝ也、」御鷹狩とかうせられての御事也、

関白大將かきりめしくせらるゝ也、

一 ミすいしんとハ、攝家の御成に供奉申者也、

大將ハすいしんをあつけらるゝニ仍也、随人馬ノ乗様クルハセテノル也、ケミチヲトラス

一 よるのをとゝ、帝王并攝家御しん所を申也、

一 青葉のすたれ、四月の一日ニ禁中御すたれ新敷を」かけらるゝを云、又ひすいのすたれ共申、又奥に有をハ」御れんと申也、

一 昔ハ関白も禁中御宿直を御さたありし也、その」御座ある所を露のうてなと申也、

一 禁裏様御前にて女中衆何も殿文字をハ不被付也、」攝家も同前也、但関白計被申付也、乍去人によるへし、

一 坊官衆ハ諸大夫ニ准也、又御室ニかきり坊官を被召仕、」諸門跡へも御室より被参也、昔ハ此分也、又出世と」坊官ハ官位次第進也、きつね戸などハ上ましき也、

一 上階よりハ卿と云、名字下ニ書之、公と云字ハ攝家」大臣家ニ書之、一南禅寺ハ准大納言位、西堂ハ准三儀位也、

一 あつまことと云ハ、わこんを云也、

一 於殿中宮々攝家被申次衆 職事被持衆」庭田殿 正親町殿  
駿河正親町 三条殿 薮殿 中山殿山科家」是ハ各羽林家也、四位・五位時を

殿上人と申、飛鳥井殿」高倉殿、羽林家たりといへ共又別也、

相府連府 中宮大夫大進 東宮大夫 太子小尹

左右内大臣唐名也

東宮亮小尹 東宮學士賓客 大將ニ付也 左衛門府生 監門衛事

東宮傳大傳 皇太子大傳 大舍人頭 白馬御會時馬を引者也

一 御下文とハ、御教書の下にて右筆方調之、奉行之」事也、

一 坊門殿とハ、等持院殿御舍弟錦小路殿御事也、

一 勘解由小路殿とハ、武衛之事也、

一 六親と云ハ、父母兄弟夫妻是也、三族と云ハ、父族母族也、

一 九族と云ハ、高祖 父 曾祖父 祖父 親父」己身 子 孫

曾孫 玄孫 是を九族と云、彦孫 マコ 曾孫 ヒコ 仍孫ツルノ

雲孫ヤシハコ

外 孫 ムスメノマコヲ云

一 他人又親類を子にするを養子と云、

一 兄弟の子を子にするを猶子と云、猶子とヨム、

一 伯父の子をも猶子と云、左伝云、

一 他人を養子にするを違法養子と云、十五以前ニ養子を」する事、更無法意、

一 吉田今堂上 祭主同 平野 在富 有脩 官務」北小路大膳大夫

典藥頭 外記師廉 外記宮内卿」外記一臈 各地下衆也、此外有之、

元弘三 建武 曆応四トセ 康永三ト 貞和五ト 観応二」文和  
四トセ 延文五 康安元 貞治六 応安七 永和四トセ」康暦二 永

德至徳共二三年 嘉慶八二 康応<sup>元</sup> 明徳四<sup>一</sup> 応永卅四年<sup>ケリ</sup> 正

長元 永享<sup>二</sup> 嘉吉三 文安<sup>五</sup> 宝徳三年 享徳三 康正<sup>二</sup> 長禄三

寛正<sup>六</sup> 文正<sup>元</sup> 応仁三 文明十八 長享二 延徳<sup>三</sup> 明応九年

文亀三<sup>一</sup> 永正十七 大永七 享禄四年 天文廿三年 弘治三<sup>一</sup> 永禄

十二 元亀三 天正十九 文禄

一親王の御ありきをは行啓<sup>ケイ</sup>と申也、院御所のも<sup>一</sup>同之、中宮のをも同前申へし、

一義御字被下之候畢、殊被染 御筆候、面目之<sup>一</sup>至、尤以珍重存候、恐々謹言、

十二月十八日 貞孝判

三好孫次郎殿

御宿所 かたかき 伊勢守

一公方様江初雁一進上仕候、此等之趣可然之様御披露<sup>一</sup>所仰候、恐惶謹言、

永禄二

九月十三日 左衛門督義景判

進上 大館陸奥守殿

上かき

進上 大館陸奥守殿 左衛門督義景

うらかき 朝倉

一白馬到来喜入候、殊於甲賀伴助七討取由候、尤以<sup>一</sup>無比類候、猶植綱可申候也、

十月廿日 御判

佐々木彈正少弼とのへ

春日殿より上かき如此

一からすまる殿まいる申給候<sup>うらかき</sup>

一下間大藏法橋御坊 宗薫 三測伊賀入道

一下間大藏法橋御坊御宿所 宗薫 三測伊賀入道

一烏丸殿参人々御中 宗薫 三測伊賀入道

一三好修理大夫殿進之候 氏綱 上所恐々謹言

永禄六五二細川宮内少輔調之

一大鷹一本到来、殊更無比類様躰、別而自愛候、次今度<sup>一</sup>春日局為湯治下国之处、馳走之由神妙候、猶晴完可<sup>一</sup>申候也、

五月二日 御判

有馬式部少輔とのへ

一今度大鷹一本御進上、一段相叶 上意候、仍被成御<sup>一</sup>内書候、別而喜被 思食候、次春日御局為湯治御下向处、<sup>一</sup>御馳走、是又 御感候、旁得其意可申之由、被仰出候、恐々<sup>一</sup>謹言、

五月二日 宮内太輔晴完判

謹上 有馬式部少輔殿

らいし如常 うらかき 大和

此書状文言、大館奥州晴光朝臣異見如此也、

一安樂寿院領山城国竹田内深草新免事、付惣庄可<sup>一</sup>有御管領候也、恐惶敬白、

至徳元年 鹿苑院殿

十月廿八日 御判

常磐井殿

一太神宮領美濃国福永御厨年貢事、任先例<sup>一</sup>可究済之旨、可相触名主



沙汰人等之状如件、

永祿七年二月十七日 御判

祭主とのへ

上つ、ミ同前杉原也、又上つ、ミ御判物壺通、貞広

二月十七日御沙汰始、例年如此御文言也、

一撰家・伏見殿・宮門跡御事、御対面御時、親王宣下「御座なき間ハ御おくりなし、親王宣下御座候得者」御おくり候也、清花ハたとい大臣ニ成候へ共御おくり」なし、

一去年被成下 勅書候、則可捧御請処、依所旁延引、「非疎略候、抑十七ヶ所之内大慈院へ可遣之旨」勅定之段、先以令存知候、子細条々雖在之、「叡慮之儀候間、不依多少可申付候、此旨宜有披露」候也、謹言、

正月十六日 義晴御判

勸修寺大納言殿

一御取乱之時分、雖如何候、当年無余日候之条令申候、「小者袋屋事、宗淳入道無別儀上者、先度之約諾之」以筋目、右京大夫堅申付候様被仰聞候者、可為祝着候、「宗三儀者、不可立入理非歟、此分にて相果候へハ、一向失」面目次第候、宜得其意候也、恐惶謹言、

十一月廿九日 義晴御判

近衛殿申給候 義

此両通御内書ハ晴完調之、

一申次法度事、蔭涼軒披露之儀、閣当番、女中へ「直ニ可被申事先例無之、自然殿中ニ無祇候間之儀者、」私宅へ可被相尋候、 天文十四九月十三日各申也、

一腰物打刀など、かねて以目錄進上、不及見云々、

一花紅紫の枝に短冊を付て送事、貴人へハ一の枝に「付也、然者同輩へハ中、下輩へハ梢なるへし、短冊結取」人に送時ハ順に結也、返事ハ逆ニ結也、結て後も短冊の「面を枝の面へなすへし、又或説云、貴人ニ奉時ハ、賞翫」なるあひた、短冊を梢に付ると云へり、不可用、同短冊を「水引にて枝に結付て送事、無之事也、付る枝の事、」月雪をハ詠し送らんにハ松などに付へし、何もゑんを」もとむへし、

一当座などの時、悉そろひて後、硯のふたにすへて置る、「なり、縦硯のふたなりとも、其時ハ大ふたと云へし、」又硯のふたにすへてと云ても不苦、

一懷帑をふんたいに置事、先下輩より置物也、然間「礼なとすへからす、

一今春之賀慶、雖事旧候、更不可有際限候、祝儀猶「期面候也、

正月七日

右京大夫とのへ

天文十二、晴元への御内書也、貞孝調之、御使同前、

一令進覽候と書事、此令と書事ハ、一かと賞翫の「心也、

一春日殿御局、又春日御局とも書へき事、勿論也、か様」にも可申也、

一春日の御局まいる申給候、と書事ハ、人々御中とかき候」同前也、

又ハ左京大夫の御局まいる申給候、かやうに「ある同事也、

一入江殿にてハ、永久庵御りやうまいる申給候、なと書事」同前、し

やうくわんのかきやう也、

一惣持院殿・しゆしやうけんへの御文ハしゆしやうけん」との御りやうへまいる申給候、と在之也、

一文の内誰々可申候とかく事、名字官書事ハ、相手」同輩の時の事也、

名乗をかくハ、相手を賞翫也、」御内書ハ又替事也、

一 探題へハ、人々御中たるへきや、進覧たるへきや、探題殿へハ」家人江付状調候、奥州探題へ氏家安芸入道、」此方此分ニ調候、

六角左京兆へ

一 僧家への事、五山長老ハ公儀にも一段御賞翫也、上所」恐惶謹言共、恐惶敬白など、もあそはして、天龍寺」侍者御中とも、又ハ侍者禪師など、も可有之、参と」一字書そへらるゝ事ハ、おもてたらぬ儀たりといへとも、」猶被敬申候ニ付てハ、如此一字書そへらるゝ事も故実也、」将又雖為平僧分、其御身公方様御連枝などにて」御入あらハ、あて所にて此旨可被申入共、又ハ可令披露給」など、もあるへし、

同

一 公家方への上所、其時の官位にしたかいて、法式の」ことく書時ハ、あて所進覧共、人々御中など、も、」一向ニ不書して、称号ハかり書事も事により勿論也、

同

一 法中への事、凡公家方同前心得なるへし、御門跡」数多御座あり、さやうのかた」ハ、撰家同前之趣也、」わき門跡已下事ハ、下」の儀不及申如常、将又禪家」の事、五山長老公儀にも一段被敬申也、

同

一 公家方への書札事、其時の官大中納言ならハ、上所」某恐惶謹言なと、書て、其人の称号けりやう三条殿・」日野殿・勸修寺殿など、書て、進覧共、人々御中など、も」可有之、将又撰家へハ直札にてハなくて、しこう人殿上」人にてても、諸大夫にてても、又ハ侍にてても、其方への状の分」にて、此旨可被申入とも、可令披露給などとも有

へし、

同

一 門跡方への事、大かい公家方同前心へなるへし、

同

一 諸大名中にても、三職へ被遣候ハ、人々御中とあそはし候」のミにて候由、かね」承候き、但かやうの段も、其家々の」しつけ有事候間、一へんにハ有へからず候歟、宜依時宜と」いへり、

寛正四年

一 慈照院殿様鎌倉殿へ御内書

上杉兵部少輔職事辞退、太不可然、所詮如元可補任旨、」可令申給之状如件、

十月十六日

御判

左馬頭殿

一 太刀一腰・馬二疋<sup>河原毛</sup>給訖、悦入候、仍太刀一腰・鎧一領」<sup>浅黄・麿毛駿</sup>扇五十本進之状如件、

十二月二日

<sup>〔広〕</sup>普光院殿  
御判

左兵衛佐殿

一 為 上意御服織物一領御給之段、委曲従局可被申候、」一段御面目之至、珍重候、恐々謹言、

八月七日

沙弥常興

謹上 大友修理大夫殿

<sup>うら書</sup>大館

一 貴札拝覧、先以祝着之至候、公儀御札御申尤珍重」令存候、御返事之段、定従伊勢守可被申候、猶愚意」聊不存疎略候、次御太刀一腰并紋紗一端黄令拝受」之候、誠以畏入候、仍太刀一振進献之候、

併表祝意計候、「恐惶謹言、

天文十

十一月廿五日

左衛門佐晴光

謹上 洪川殿

尊報

一 恐惶も草に書たらハ、真の恐々にハ劣と云説もあり、「然共、真の恐々にハ、恐惶ハ勝るへき也、真草にての上下、」何にも書札にいたりてハ故実あり、如此状如件、或謹言、」或候也なと書事あり、か様に書事遺恨する人あり、「其時ハた、恐々謹言を草に書ハ不苦、恐々も草に」書ハ、只謹言なと同類也、

一 御つしのたなにハ、ひとりちんのはこなとおかれ候、

一 くるたなにハ、てはこ、沉の箱、女房衆かほの道具入かけこ、料幣「硯、双楯なとおかれ候也、

一 御相伴衆へハ敬文言あり、一色左京大夫殿・

山左衛門佐殿・細川讃岐守殿、」此衆取分賞翫あるへし、

一 諸国四品之衆有之、四品の衆へハ少差別あるへし、

一 同朋衆への事、歳阿弥陀仏進之候、相阿ミた仏進之候、」千阿ミた

仏床下、兼阿進之、御届所共書候事可」有之、同朋衆計何阿弥陀仏

と書ハ、殿文字と同」心也、又常ニ喚事も何阿弥陀仏と喚候ハ、殿

文字」の心也、彼書状にハ何阿と計書也、加判有之、又ハ」何阿上

人と書事有之、是ハ心安間ハ一興にも」書事也、惣別同朋をハ賞翫

ニハあらず、又賞翫しても」不苦、

一 書札事、正得立文本也、半切ハ略儀也、一乱已後」用之云々、

一 文書の裏ニ判形を居事、半程より下へさけて」可然、奥端へ寄たる

ハ見にくき也、但令てとある」文書ニハ、其下にさけて判形をする

事もあり、

タイスケ  
新大典侍

一 武衛代々

代々左兵衛佐

常徳院殿御代

正三位

從三位スケ 副將軍

義敏

義良

義達

義統

初官治部太輔

左兵衛佐

義近

羽林家

一 官次第

侍從

少將

中將

參議

中納言

大納言

——

一 聖護院御門跡

法輪院三山檢校

千手院准三后

後千光院三品親王

良瑜

道意

覚増

満意

覚誉

護符

護符

覚誉

解脫院

義教息

青龍院准三后

後淨妙寺

如意寺

道澄

義觀

道興

道応

道増

一公卿殿上人とハ、悉名を云たてたる儀也、

殿上人也

一公とハ大臣、卿とハ大納言以下三位以上、雲客・四位・五位・六位、月卿ハ公卿の事也、

一冠者 烏帽子を着して云無位無官の人を云也、

一叙爵 関白御子孫ハ正五位下生付カ從五位上ニ生御付也、「太政大臣の子ハ從五位上生付カ從五位下生付也、左大臣以下ハ」從五位下生付正六位上生付也、

一非藏人 四位藏人をハ貫首と云、五位藏人をハ五位職事云、「六位

藏人と云、是ハ公事まつり事の奉行也、非藏人ハ」其儀を不存知之、

一太政大臣ハ即關官と申也、トウリヤウノ官共云、撰家御衆も」此官

ニ御成候而ハ、ヤカテ御辭退在之、

一塩梅 臣とハ大臣を云、舟楫 臣と云、

### 御袖判

近江国守護職事、所補任佐々木彈正少弼定頼也、早」守先例可致沙汰之状如件、

天文六年八月十日

一公方様勸進帳ニ被成御判時、如此調進之、

日吉社御奉加帳 外題ニ如此加銘也、

征夷大將軍源朝臣御判在之

又ハ権大納言共、准三宮源朝臣共在之、

奉加帳ニ被成御判時ハ、国々御下知可相副也、

仁和寺殿

御弟子

梶井殿

御弟子

任助——守理

応胤——最胤

妙法院殿

青蓮院殿

大覚寺殿

聖護院殿

常胤

尊朝

義性

道澄

三宝院殿

義演

一三職之内、当職之時ハ、於殿中小屏風を一方に立て、「其内ニ当職の人御入候、其次ニ当職、次ニ職を被持人」御入候て、次第ノニ祇候候也、

一大名同名衆、其惣領の前にて殿文字付へき哉否之事、」たとへハ佐々木殿前にて彼同名刑部少輔殿と申てよき也、」其惣領を賞翫の故也、

蛸庵仰

一於禁中の護摩をハ、何の法にてもあれ、御修法と申也、」又將軍家にて御修法と申也、自余ハ何所にてもあれ」不可申云々、

一法印ハ四品の次なり、四位ニ准也、

朱印

一天皇トハ、皇子御ヨウ年ノ御時、御位ニ御付候ヲ申也、天皇」元服ト申也、

一大上天皇尊号院御官也、上 皇 トハ院ノ御名也、御法躰」有テ法

皇ト申也、

一伏見院ノ宸筆ニカキリ正応ノ宸筆ト申也

年号也

十句五韻

口あ い う え 江  
口か き く け こ  
舌さ し す せ そ  
舌た ち つ て と  
舌な に ぬ ね の  
唇は ひ ふ へ ほ  
唇ま み む め も  
口や る ゆ 江 よ  
舌ら り る れ ろ  
唇ハ い う え 於

あかやの三字ハ喉内  
さたならの四字ハ舌内  
はまわの三字ハ唇内

輕重清濁依上字

去入平上依下字

於此五韻内喉下唇之

三内能々可学也

口内ノ吟 其間子口決

羽 宮  
双一 黄二 盤三 一四 平五  
宮 高 角 徵 羽

黄鐘や双盤平調一越ノ其名ヲ呼ヘハ答ヘコソスレ

大名 寛正年中記録

細川右京大夫勝元朝臣管領 斯波左兵衛佐 畠山彈正少弼政長  
山名右衛門督入道宗全 細川讃岐守成之 一色左京大夫義直 畠  
山左衛門佐義統 佐々木大膳大夫持清

御相伴衆

山名右衛門佐 細川讃岐守 一色左京大夫 畠山左衛門督 佐々  
木京極大膳大夫 赤松左京大夫 大内左京大夫 土岐美濃守 武  
田大膳大夫

国持外様

斯波修理大夫 武衛親類両家様ニ申人也 細川民部太輔和泉半国守護也  
山名彈正少弼 金吾 同次郎 彈正少 山名相模守伯耆国之守護也  
細川刑部太輔 和泉半国 山名兵部少輔石見国守護也 仁木左京大夫  
伊賀国守護也 山名彈正忠 山城国 佐々木京極中務太輔 光祿  
介加賀国守護也 佐々木六角四郎近江国守護也 赤松次郎法師 富樫  
土岐美濃守 武田大膳大夫若狭 今河修理大夫駿河 山名修  
理大夫石見国 国持テ御相伴ニ不參之衆大略  
此分朱点

国持之准衆

細川陸奥中務太輔 佐々木加賀守 撰津掃部頭

外様并大外様の事大略定在国

北畠左衛門佐 准国持 細川中務太輔 新田大島左衛門佐  
伊賀仁木右馬助 山名伊豆守 一色右馬頭  
新田岩松兵庫頭 吉見太郎 山名宮田五郎  
丹波仁木兵部少輔 四条上杉中務少輔 准国持 佐々木京極加賀守  
江見美作守 土岐民部太輔 赤松新藏人  
赤松中務少輔 佐々木鞍智 撰津掃部頭  
二階堂大夫判官 波多野 町野加賀守  
畠山次郎 末野 佐々木黒田  
山名撰津守 北野一色 北畠小原左兵衛佐殿  
姉小路左衛門佐 里見 山名河口

大  
山名鹿野

鹿草

細川上野介

赤松上月

佐々木多田

土岐ソカヤ

大外様

細川土佐守

山名磯部

関

畠山日向

凡此分此外数多有之

御供衆

細川右馬頭入道  
左京亮義直舍弟

一色兵部少輔

細川民部少輔

山名七郎左衛門佐  
因幡守護

上野民部太輔

赤松伊豆判部少輔

赤松弥次郎

同兵庫助

一御家人国人事何も同前  
ムメツ カヤウ タノムラ

梅戸 萱生 田能村

ウ 福屋

凡此分、此外数多有之、大略此衆伊勢国住人也、但「スウ・福屋ハ

大  
山名有道

細川土佐守

細川駿河守

赤松葉山

佐々木尼子

大  
山名磯部

細川観音寺

西佐々木七頭

長野

今河堀越

里見

土肥

江見

山名鹿野

畠山宮内太輔  
備中守護

細川上総介

大館兵庫頭  
讃州成之舍弟

細川讃岐九郎  
淡路守護

細川淡路守

武田治部少輔

伊勢守

同備中守

伊坂 雲林院

神戸」

嶺 加太 後藤 ス

大  
美濃仁木

細川観音寺

桃井右馬頭

土岐佐郎木

土岐鷲巢

石見国也、

一山徒使節事

杉生 円明 行泉 護正院」

上林 西林 月輪院

金輪院 南岸 蓮養」

乘蓮

山徒の衆の使節是也、山門の儀に付て御使なとさせらるゝ儀也、

是ハ規模也、

一使節の外の山徒 真野西養 聖行院」

木戸十乗 郎の坊 和余の

金藏坊」此外数多有之

一御倉の衆の事 正実 定光 定泉」

玉泉 此等也、

是も山徒の内成といへとも、御倉を被仰付也、

一衆人の事、 豊筑後 山井安芸 同筑前

凡此等也、豊筑後ハ公方様御筆の御師範に参也、

一護持僧事、 聖護院殿 実相院殿 三宝院殿」

大覚寺殿 円満院

殿 定法寺殿 住心院」

若王子 尊勝院 上乘院 浄土寺殿」

竹内殿

大略此御衆也、月次の御祈禱被勤之、立春にハ当年星」御進上、

一長老達の事、相国寺 鹿苑院 崇寿院」

等持院 等持寺

此御人数年始歳末の御礼ニ参賀也、此うち等持寺ハ」西堂の位也、

然共長老達と同前ニ参勤也、

一律家浄土宗長老の事 泉涌寺 元応寺」

盧山寺 長福寺 律家凡

此衆 法勝寺」

知恩寺 知恩院 三伏寺 延福寺 誓願寺」

安養寺

凡此人数御対面の時、禅宗長老達は御ゑんまで御送り候、」律家・

浄土宗ハ御おくり無之、

一会下長老達の事 大徳寺 妙心寺

凡此分也、参賀の時御おくりなし、此衆、年始歳末にハ」祇候なし、

自然之儀也、

一 御比丘尼方宮々の御事

安禪寺殿 けいあん寺殿 大禪寺殿 凡此御衆、

一同御所三慈知恩寺の御事

南の御所 入江殿 三慈知恩寺 慈受院殿 宝鏡寺殿 光照院

殿 曇華院殿宮の御なり候事も 在之 凡此分也、

一 かミくの御事 くわうしゆ院 ほうし院 しゃうこん院 すい

け院 ちしやう院 ほう光院 せうけ院 しくわうゐん しゃう

くわう院 凡此分也、

一 御せうしの事 ゆいせん てうけん しゃうせう 石見など申類

大かた是也、かれう役の事寢殿并番所の さいうち仕也、又遣教経な

との時も所役有之

一 御所侍の事 勅使テツシ 河原 直見ナウミ 渡辺 大略是也、此等殿上の間

の宿直を勤申也、又御かうしなとも殿上 のハ勤申也、将又御判は

しめの時、御判の物を取次申役 有之、

一 御雑色の事、数多有之、是等ハ侍所へ随者也、

一 御朝夕デウシヤクの事、是も数多有之、御酌の儀に付所役有之、

一 公人の事、是もあまたあり、政所かたへしたかふ者也、

一 御室 山門三門跡 青蓮院 妙法院 梶井座主共申也 三井寺の両

門跡 円満院 聖護院 醍醐長者 三寶院 脇門跡と喚申ハ地藏

院事也 勧修寺門跡 大覚寺 浄土寺 実相院 南都両門跡ハ一

乗院 大乘院事也、花頂門跡 岡崎門跡 院家衆ハ青蓮院 門跡

にてハ定法寺 尊勝院 三寶院門跡にてハ水本坊 報恩院の事也 理

性院 松橋 此類也、出世と申ハ成身院 西性院類也、院家の下

也、宮門跡何も准后ニ御成候、准后 極官也、於禁中ハ官位次第御

進候、於武家も同前候、但武家 にてハ聊意趣被仰旁在之由也、

一 宮々の御事、伏見殿 常磐井殿 と申て御座候、木寺の宮と申も

御入候、然木寺殿御事ハ、近代御 断絶と存候、如此之宮々をハ奉

号竹園之由承候、公方様御対面之時ハ御ゑんまで送り御申候、撰

家 よりも猶ふか 御礼之趣有之、

一 撰家之御事、近衛殿 九条殿 二条殿 一条殿 鷹司殿 此五ヶ

所を申也、関白をまはり にもち候、公方様へ年始以下御参

賀御対面之時ハ、大臣に御成候 をハ御ゑんまで送り御申候、御官

いまた大中納言にて 御座候をハ送り御申なく候、五撰家御次第ハ

当所御官位 次第也、

一 清花の事、転法輪三条殿 久我殿 西園寺殿 徳大寺殿 花山

院殿 菊亭殿 大炊御門殿 洞院殿 如此の御人数也、撰政関白

を無御存知にてこそ 候へ、大かハ撰家同前、官位にいたりても

別儀なし、然共 此人々ハ大臣に御成候といへ共、御対面の時おく

り 被申に不及也、御息女ハ大上臈に御参候、撰家御息女ハ 御ミ

やつかいにハ御参なく候、

一 此外公家衆事、正親町三条殿 日野殿 中院殿 勧修寺殿 中

山殿 烏丸殿 甘露寺殿 冷泉殿 飛鳥井殿 海住山殿 万里小

路殿 葉室殿 山科殿 庭田殿 中御門殿 広橋殿 阿野殿 姉

小路殿 高倉殿 其外数多、かやうの方々あまた御入候、此内に

ても 大臣に被任候方も候、然時ハ御用の様牀清花同前也、此

人々息女ハ上臈に御参候也、但日野殿 三条殿などハ 大上臈にも

被参候也、

藤大納言入道殿へ藤長被尋申返答

一御成の時、亭主唐門の内庭上まで可然歟、但仁躰に」より門外まで可然也、

一御立砂の間より御縁へ御こしよせらる候也、

一御馬の時ハ、御ゑんのきハまでめされ、御乗馬の時も「御縁よりめさる、也、

一御走衆六人庭上ニ祇候の事、殿中勿論、諸家へ御成」時也有之、但近來各申時候間、慥申かたく候、

一式三献の時進物、御太刀 鞍置馬 練貫 十てう」二ツ折ニして広ふたにすハる也、御鎧 弓 シコ」進上也、御様躰共見不及候也、伊勢守存知候也、亭主」御盃拝領候、御馬懸御目候時、烏帽子懸候て、裏打の」前をかいて同名人懸御目候也、小笠原指南也、

一御馬御覽せられ候時、御ミすこまるにかけ候事、御供衆」被勤之也、御供衆以下庭上に祇候、御釵を持て御縁に」祇候候、其間に亭主うらうちを改て小すハう着用、

一御湯漬の時ハ、御盃不参候、万松院殿御代に参候事も」御座候つる、

一御膳一かと参候、御相伴衆へハ三五まで候、

一御湯漬あかり、其間に御きうそく候也、

一初献二献過て、三献目の御盃献まで参候て、御能御座候へハ、」御供衆兩人ミすを被上候也、おもしとらる、也、

一御能はしめ候事、三献目也、伊勢守存知候也、不参之時ハ」上意次

第三御供衆存知候事も候、

一御能こハれ候事、公家大名又ハ伊勢守御供衆もこハれ候事」も候、

一御能過て其献ハ参候也、観世大夫庭上にて謡申也、

一三献めの御酌の人、御能一番の間持て祇候候也、御能果て御色を」

なをして持て被参候也、其時献を開召候也、御くわへ同前、

一御下かハらけの事、手に持て被参也、

一初献にハ加られす候、御加ハ持て被参候、但御酒御銚子に」なく候へハくわへられ候也、

一進物ハ御盃きこしめし候時、伊勢守持て参候、亭主」召出御礼被申也、物によりて持参候、御酌の人わきへ」少よられ候て可然候、

一御休息の所に同朋衆おかれ候、又ハ誰人成共上意次第也、

一大略二献めより御供衆御とをり御座候、御相伴の公家」武家御供衆へ盃をかけらる、也、

一御休息ハ御気色次第也、

一撰家清花御参之時御酌の事、御前へ御しきたいの」度々御前へ御銚子と御四方とを持て参、おき申さる、也、」撰家清花まで御四方、御相伴衆への御盃をは、御酌の人」持て待を召出拝領候也、

一御盃拝領の人の様躰、常のことく御酌の人待候を召出て」頂戴、御相伴次々へハ、御酌の人躰持てむかい候を、座を」立す其ま、給候、

一御折置被申様、御右に二合、撰家など御参賀の時ハ、」一合なかにもおかれ候也、二合より外に参候事不及見」申候、御精進次魚物、

一大名へ御成の時、殿上人御酌などハ仕候、於殿中又所に」より候て、御膳なども被参候、御酌ハ末」迄とをさる、也、

一三ほうせんの事、大なるかハらけに三色入て候を、」左右さきのをそ、と中へくつして用る也、若人」などハ中にぬきくるミ候を用可

然候、参様常の」御膳のことく也、

一御酒被加候時ハ、盃に入かけ候ハね共、被加候て可然候、

一御折の外面向の時参候事ハ無之候、内々の時ハ」何にても参候時候、一面向の御成の時ハ、御相伴なき公家御供衆」度々に被参候、御走衆

ハあい」に、



一 御蠟燭御前へハ一ツ、御座敷ひろくハ二ツも可參候、「御能御座候時御縁の妻戸の柱のきハにおかれ候、」御供衆御存知候也、舞台の柱のきハに二所左右に」あり、有明御供衆御存知、

一 蠟燭御前のハ御供衆、其外ハ同朋衆也、せこの御酌」をハ同朋衆也、御蠟燭持て參候時、右に持て左の手にて台をかへられ候、さきを」被取候時は、器を左に持、右にさきとりを持たるか能候、

一 蠟燭のさき取る候時、なかれたるを取て、其後其ま、」にても、ぬきても両様也、

一 御能過て申衆庭上にてうたひ申候時のこうしや、」御氣色を同御相伴衆・御供衆のしゆんの舞御さ候、さし」次第也、清花の御事ハ、時宜によるへき歟、又御氣色次第也、

一 御成の時折紙、伊勢守、觀世大夫・今春・日吉一度に持て一ツ、」田楽ニハ庭上の御縁のきハおき、又一度ニ持て被渡也、

一 御成の時亭主御釵拝領候時、伊勢守御太刀持て」參候、御馬副候へハ、御馬と伊勢守被申候也、御右の」方におき候を、御手をそへられ候を拝領候なり、御具足」以下拝領候事も御座候也、

一 御成の時御酌の事、一かとなる献の時御沙汰候也、七献・」十一献の程、但上意次第也、惣へとをさる、事候、

一 御成の時、同名・家子・年寄共御とおりに被下候なり、」御一献過て御馬太刀にて御礼申候也、

一 進物持て後日に參候に、練貫一重被下事勿論、」同朋衆事ハ左様候歟、不存候、

一 御成の時練貫ならて御服進上の事、不見及申候、  
一 も、ひきの事、三月まで十月一日より也、きやはん」同前、きやはんをハ御一献の間被取候也、

一 たひ御免次第、若手の時御免候は面目にて候、

一 御手水被參候時、たらいにはんさうをすへ候て、御手水」かけ申て以後、御はんさうたらい同人二度に被取」候而可然候、

一 直垂の時御扇、末ひろかり、中おりも御用あり、

一 うら打の時、さやとひきめさけを切付の事、必」つゝら也、所々に家の紋をかき候也、

一 御台様無御座時ハ、御縁の御とをり有間敷の」よし候へ共、近来御座候事候、一番に伊勢守、二度目」藤宰相、三度御座候得者細川右馬頭存知候事候、」御酌の人参向の時ハ、北面ニ御とをりより少奥に」祇候候也、御ひさけの事、伊勢時ハ同名、其外ハ御供衆、」庭上にいられ候をおりて被加候也、

一 西むきの御參賀殿上人申次、若俄の時ハ御供衆」の内被申次事も候、撰家・清花・宮門跡・地下者なども」御參の次而には被申次候也、撰家をハ丞相よりハ」御縁まで一度おくり申さる、也、清花をハおくり申」されず候也、長老以下ハ蔭涼軒申次也、御縁まで」一度おくらる、也、

一 御参内の時、從殿中御立烏帽子・御直垂・」御大口・御ぬり興立石より御おりなさる、也、参会ニ」各參候也、伝奏ハ御輿のきハまて被參候なり、」御供衆・走衆・同朋衆かへしもたちをろさる、也、

一 正月十日御参内式日也、長橋局御ちよくろとして」御冠・御装束御着用あり、御參殿上人御釵存知也、」三献參、御ひらさや被申出御進上、後日ニ為其代」千足被參候也、長橋局へ五百足御ミやけ也、三献參候、」女中衆ミやつかい申さる、也、殿上人もまします也、同朋衆」御装束唐櫃に付てあり、御盃參候時ハ御次の」懸筵のそとに祇候する也、

一御たのむに御白太刀・御馬御進上候、御返に「御白太刀・打エタヒロフタニすハリて参、伝奏御使也、

一御亥子に禁裏女中衆へ御殿重出され候、諸大名へハ絵のつ、ミ紙糸のをつけたる人も候、その外は「皆切箔也、上を引合にてつ、まる、也、

一歳暮に美物済々御進上、宮の御方女中衆まで、

一始而天酌天盃の時ハ、御礼御座候由承及候、伝奏「存知事候、一禁裏にて御酌の事、常のことくちと御慰懃に」御さた候也、



一禁裏にて和哥御会、近年無御座候、御当座惠林院殿「御時御座候つる、近年近衛殿御参、二献めに参候也、

一御成の後日に進物進上の時目録の事、高檀紙を「二に折て調候様ニ覚候也、

一口宣の事、烏帽子名より直ニ受領時ハ、仮令藤原「国次とありて任因幡守如此也、又官途より次第」の時ハ、治部少輔国次任因幡守と如此候次第也、是にて「ミしる事也、

一惣領に近き同名の事、公家方ニハ根元次第被用之、「武家方ニハ其時々の近きを被賞候也、

一御内書鳥子の時ハ、必半切たるへし、

一こし文の時封様の事、如此也、又如此も封也、「是ハ少平臥の事也、然者我より下手への時如此」なるへし、

#### 御下知宛所等条々

一先三職へハ、仮令右京兆代如此也、烏帽子名之時ハ六郎殿「代如此、殿文字入也、三職共以同之、

一山名殿・一色殿・能登守護・讃州此四人へハ、仮令山名「匠作代如

此有之、又烏帽子名之時ハ山名次郎代如此」有之、此四人殿文字無之、

一此外御相伴衆国持以下ニ至迄、何も打付書也、

一細川典厩之事一人ニ限、前四人之衆之如く細川典厩代「如此也、ゑほし名の時同前、

一雑掌と書事、撰家・清花・門跡・同脇門跡迄也、次公家衆「何も此分也、仮令書やうハ近衛殿雑掌、又ハ近衛家」雑掌共、依時宜如此也、

一清花ハ惣而殿文字無之、仮令久我家雑掌と必認之、

一公家衆へハ仮令広橋家雑掌、又ハ官迄書事も有之、「然共公卿以前ハ家之字無之間如此調之、乍去又藤「中納言殿類、藤とはかりハ不書之間、か様之類へハ必」藤中納言雑掌と有へし、殿上人之間ハ家字不可有之也、

一日野殿事、殿文字有之事もあり、又必家と書事「勿論也、然時ハ撰家同前、御一人ニ限たる儀也、

一門跡、仮令大覚寺門跡雑掌、同脇門跡以下まで如此、「仮令若王子雑掌、准自余也、

一御室、御一人ノ事ハ、文言ニ御室雑掌領、御一人ニ限て「領の字入也、宛所之時ハ御室雑掌と計在之、門跡」とハ無之、

一諸五山長老、西堂迄ハ雑掌とあり、此外ハ無之、然平僧「たり共仮令等持寺などの類、寺に付ての御下知にハ」等持寺雑掌と有之、身ニ宛てハ平僧ハ雑掌とハなき也、

一浄土宗以下、是も寺に付てハ、仮令浄花院雑掌如此「類同之、身ニ宛てハ何長老、又ハ何上人と計有之、

一前と書事、限奉行衆引付ニなされつる間ハ、仮三ヶ年「以後も前と

ハ不書之、引付になされてよりハ、則「假令前」筑前守藤原朝臣なと、書也、引付にならざる間ハ中らう也、

一散位と書事ハ、五位以上之時如此、假令左衛門大夫如此、大夫の間之」事也、

一沙弥とあるハ入道しての事也、大名以下何も同之、

一評定衆の事、縦其名字に付たり共、御判を被申請、御免」なければ其沙汰なし、先年撰津守家に付御免なけれ共、」其沙汰に随由被申候処、以前の御気色ニより一旦被申」たれ共、迷惑仕られ、様々の御佗言にて御免之由有之、」上意之趣ハ、奉行を始其役の家ニ生るれ共、御免」なければ、其役に随たる上ハとの上意之由申伝云々、諸役」共ニ同之、

一常徳院殿、美濃守に御受領ならる、也、然ハ公方様も御受領」尤の御儀也、

一閏月御用の事、六月・十二月計也、水無月の御祝等、又歳暮」御礼ニヶ月ニ限、後月可為御用也、此外ハ閏月御用の事無之、」御下知等用如此也、

一人の養子の事、男ハ十五歳、女ハ十三歳迄也、是より歳過ハ」養子にハならぬ也、自然公事などの時法度如此を限候也、

一西堂の事、御内書ニ假令心如寺西堂也、此方へ被成下時ハ、」縦住持なくて平僧の持たり共、西堂の准枝たるへし、

一申入候など申事ハ、卷数風情の物を申入と申也、書物を」ひらきて御目に懸さる物ハ、何も申入と可申哉、書札」などに如此有へし、

一左京大夫殿・宮内卿殿など中臈への御下知ハ、左京大夫」局代申と可有之、

一小上臈へハ、御佐子上ろう御局雜掌申、又ハ代申共有之、」惣別公

武の書様公家衆ハ雜掌、武家衆ハ代にて候、」けりやう武家のうちにて代書にせさる人々の事ハ」不及申、大上臈も小上臈大かい同やうに調候得共、」大上らうハ今一かと御入候、上臈御方雜掌共書申候、御方と」候事、猶うやまい申儀にて候、

一御下の事、大かい中らうほと、ハ申ながら、中らうよりハ」下にて候、はりまの局と候て、代とハ候ハす存候、

一ひ女の事、白川女申と候と存候、但御うハひ女にて候へは、」御下ほとと書様たるへく候、惣別ハ女はうをハ局と申候ハ、」貴賤によらざる事にて候、乍去御下知などのしやへつ、凡」此分候、如此ハ候へ共、時により奉行の故実あるへく候、

一太神宮 八幡 春日 御護、此四社にかきりて嚴重と云」二字有之、此二字有之、奉書ハ永代やふる、事無之也、

一棄捐とある事、御下知などに書事ハ、永代やふる事」なき也、永代と棄捐ハ同事也、然間此棄捐と有之事、」大方の儀ニハ是を不書事也、棄捐とあるハ永代すてゐる、」儀也、永代のかきかへ也、

一永代と証文などに書候事、此永字ハ永くやふる、事」無之事也、永代つきぬ事也、普代とあるよりも猶永代ハ」永くやふれす云々、

一立紙の奉書ハ、山城国とかくといへ共、城州何庄とも」調之也、又折紙の奉書ハ、城州とから名をかくといへ共、」山城国とも書候事也、

一<sup>ヘイエン</sup>炳焉、あきらかなる儀也、

一散位とかくハ、叙爵して兵衛大夫・掃部大夫など、受領も」せず、官にもす、まさる時書之也、

一奉行を引付になさる、云事、一段ときはなる事なり、」ふれ折紙なとにも、引付に入てハ折帋にもかきのせず、」若き奉行など自身ふ

れ候也、公人奉行被渡也、其後「前信濃守・信濃前司など書之同事也、

一侍所ハ、天下成敗かたを被申付職也、其下にて所司代存候」なり、開闔ハ、所司代より公方へ物を申、かいかう也、

朱印

大和家蔵書十

(表紙表題)「大和家蔵書 十」

中表紙

(付箋)「大和守晴完入道宗恕筆記 二」

(朱印「明治十四年改」)

(朱印「明倫館蔵」)(朱印「安政七改」)

「御具足進上之時、可懸御目様之事、兩人してかきて」出なり、さき  
をかく人ハ若輩也、跡をかくハ上手也、横さまに「兩人して持ても、  
主人の左の方一間計のけて下に置いて、」先の方をかく人立て退へし、  
具足の弓手の方と胸板と」角かけて、主人に向やうに置へし、酌取  
人銚子を出加て、「主人御酒聞召時、跡をかく人少退て居候、其時  
少より候て、」引置向の板を御前へ成、御目にかくる也、其後又も  
との」ことく兩人してかきて帰なり、桐野流ハ又様躰かハる也、」  
御具足進上の時ハ、必御太刀そへて進上申也、御太刀ハ「我と持て  
出て、具足より少のけて、御太刀を参て御礼を」申也、いづれも人  
によるへし、

「鞍ほね進上の時ハ、前輪を主人の方へなし、両方の居木を」両手に  
て持て出て、是も一間計のけて、のりかたと前輪」との間角かけて  
左の方ニ置也、又前輪のすわまを左の」手にて持、後輪を右手にて  
持て出て、前輪を御前へ向て」懸御目也、乍去た、居木を持て出た  
るよしと云々、

「鞍皆具共に人に参る事も可有之、其時ハ後輪の方より」右手を入、  
前輪を先へ成て持、左の手にて鐙のはとむねを」向へなして、ここ  
に手を入れて持出て、まつ鐙を下に置て鞍を」御前に置、さて鐙を鞍

よりも少左の方へよせて御目に」かくる也、鞍ほね進上にハ鐙なとそゆる事なし、

一鞍ほねと御太刀と進上の時ハ、太刀をハ如常右に持て、「鞍ハ左手にて後輪すわまの方より手を入持て出、さて」御前にてまつ太刀を下に置、鞍を是も如前にまいらせて、「さて下に置たる太刀を召上て、鞍より少のけて如常」進上申也、又鐙と太刀と参事、是も鐙をはとむねを」向へ成持て出、先鐙を置いて、さて太刀を参る也、

一弓をわたす事、ほこさきを我左へなして渡なり、うつほハ」結をとりそへ渡なり、渡やうハ同也、矢も同前也、

一ゆかけハ四季ともにさすへし、

一馬の沓ハ打と云、へしとると云也、人ことにおこすと云事」わろし、

一ゆかけハ右からさし、左から取なり、

一沓ハ左からはき、左からぬくなり、

一くわせんの鞍お、いと云ハ、赤もうせんの事也、

一はりかへ持すへきハ、八幡社参などハもたすへし、清水」などへハ持すへからず、

一白鞍とハ銀にてする、又白ふくりんなどもあり、

一弓袋に入たる弓ハ、外竹を下へなして、弦の方を上へ成て」かたくる也、はつして袋にハ入へし、長刀のことし、

一馬上へ矢を可参事、右の方より可参也、弓など渡ことく」なるへし、両の手にて参也、中間などハ片手にて可参なり、

一馬上の時扇小者に被持事、三職并諸大名共に馬の」さきへ被持なり、一轡懸御目様事、水付の方をまかいの方ひとつに右の」手にて持、はミの方を左の手にて持、ミせ申なり、渡時も」同ことくにして渡也、一うつほの上にしよう又鞭さす事ハなし、鞭ハ馬屋の者」さして馬の

きハに居へし、しようハ小者さしてさきへ行」なり、

一式将の時ハ、かまやり・長刀・やりつくはうなどは」もたすへからず、

一沓・足なかハ、笠の夫にもたすへし、

一馬を主人へ懸御目事、向を一番に御めにかくるなり、」そこにてしさらする也、さて右の方をミせ申へし、其後」うしろをミせ申也、さて左なり又向をミせ申て、其時も」又しさらする也、

一馬の毛付すへき様の事、た、本の毛を付へき也、」駿ハふちと付也、栗毛駿、かやうに付へし、青黒をハ」青毛とかき候、又佐目ハ佐目と付也、かすけとハ不付なり、」足の四白を四白と云也、踏雪もた、佐目と付へし、

一くつわぬる事、何の時もぬりて乗事くるしからず、小笠原」信源ハ、いつれの時もぬりてのられしと也、但はミをハぬら」さる也、

一公方様御弓袋ハ、た、ハあさき也、きくとちハあり、けしやう」革ハなし、さきハた、ふくろの如なり、又大将御拝賀などの」御時、式将の御時ハ御笠袋色ハ白也、此時はきくとち・」けしやう革もあるへし、

一弓袋色の事、あさき・黄色・赤色にもすへし、但赤ハ」いたつの心なり、けしやうかわ・きくとちあり、

一公方様御馬上の時、御たらし御矢を可参事、御弓を」つるを下へ成、御矢をハ外竹の方に右の手にて持て、」御馬の左の方へ参する也、にきりより上と本はすの少」上と矢に持そへて、にきりをとらせられ候やうにまいらすへし、」もちやうハ手の甲を下へ成て可参也、一御刀ハ左より可参候、御右より可参物事、御扇・はなかミ・」御鞭・御ゆかけ御右より可参云々、

一 せきつるハぬり弓にかくる也、末はすより本はすまでせきて」ぬる

ヘシ、

一 負征矢<sup>ライソヤ</sup>一腰とハ、廿五・廿・十六、た、そやと云、おい征矢<sup>シ</sup>と」云時ハ如此にこる也、

一 引目一腰ハ矢数四ツ也、一束ハ矢廿也、

一 犬射籠手ハ一二と云ヘシ、行騰ハ一かけ二懸と云、

一 手綱腹革ハ一具、沓ハ一足と云、

一 ゆかけハ一具二くと云也、

一 公方様御乗馬始の時ハ、必河原毛をめさるゝ也、御牲は」何にても御座候へ此分也、余の毛をハ御用なき也、たとへハ」等持院殿御時勝時河原毛御吉例云々、

一 轡を人に出すにハ、紙に裹て水引にて中をゆい、台にすへ」ても出すヘシ、包やう別に替事なし、

一 馬の寸尺の事、馬の尺ハ惣別四尺の者なり、其上を一寸」二寸三寸と云也、四き・五き・六き・七き・八寸・九寸・五尺と云」なり、

一 三尺九寸をかへり一寸と云、三尺九寸五分をかへり五分と」云なり、

一 鷹の羽の事、真鳥羽と云也、鷹の尾一尻二尻十尻」廿尻と云ヘシ、

一 鷹の尾同前也、鷹の尾真羽を紙につ、ミ」人に遣ハ、別に包て遣可然也、書状などにハ真鷹羽いく尻と」書へきなり、

一 弓と太刀とを人に遣にハ、一度にハ不可遣之、先弓を渡で、」渡太刀をハ後に可渡也、

一 弓を白木二張なと人に遣事有間敷也、むらをぬかさるハ」二張三張五張十張も可遣之、むらぬきたるをハ一ちやう」より外ハ不可遣之也、

一 御馬一疋<sup>シルシ</sup> 栗毛印<sup>シ</sup> 雀目<sup>シ</sup> 結<sup>シ</sup> 此分可然也、

一 征矢を人に渡事、別にかハる事なし、矢箱に入候とも、常の」矢の心得なるヘシ、

一 しハラさる鞍を懸御目事、左の手に前輪をのせ、後輪をも」ならへて持て、右の手にて居木を二ながら持て、前輪の乗」あひを主人の

前へなし、後輪をも同如に置也、然者後輪」うらの方上に成也、居木ハ鞍の右の方にならへて置ヘシ、」又鞍の両方にしハリたることも置也、

一 すかりまたと云事、かふらとならひて有時、かりまたを」すかりまたと云也、かふらのなき時ハた、かりまた也、

一 上の御馬に乗時覚悟の事、乗さまにつくはい鐙の」くつこみに手をかけて乗ヘシ、但馬ハ上の御馬なりとも、鐙」わたくしのならハ手

をかけず、馬ハ私のなりとも、鐙上の」ならハ手をかけて乗ヘシ、又御馬御鐙なりとも、はや人の乗」たる跡ならハ、手をハかけす其ま、乗ヘシ、手をかくるハ越度」なり、

一 弓うつほ御めにかくる事、弓をハ右に持、うつほは左に」腰のへんを持て参也、弦ハ内の方へ成ヘシ、渡申時は先」弓を渡申ヘシ、後

にうつほをまいらす也、立て置所あらハ」立て置ヘシ、立所なくハ下に弓もうつほも置ヘシ、

一 輿と馬と行合ての覚悟の事、惣別こしにあひてハ、はう」はいたりといふとも、馬のかたより礼儀あるヘシ、馬を打のくる」心なり、女房衆又ハ上たる人にハ弥其心持肝要也、

一 鞍の寸法の事、三尺計なるヘシ、金の定又ハ我手にて」五寸を以てとる事もあり、三尺と申共、三尺にハせぬもの」なり、二尺九寸又ハ九寸五分ほとらひ可然也、こつかハ六寸なる」ヘシ、結の穴とひなさきと一ふせなり、結ハのへて手の四寸」ほとなり、さきふちむ

すひとつかのくけめハ、穴のとをりに」なる也、是ハ常の鞍也、又竹のねのふちハ、犬追物又馬を」せむる時用也、其外にハ不用、こしらへやうハ同前也、節数は」半なるへし、節の目のとをりにとつかのくけめあるへし、結と」つかの革とちかひたるハわろし、同革吉也、紫革ふすへ」かわ也、又をもてかわにてハせぬ也、

一 錫を持御酒加へき事、

一 太刀と小袖と出時ハ、小袖をハ別人持て、太刀をハ其ぬし」持て出候、あいてにより候て出やうかわるへく候、主人などへ」まいらせ候ハ、ゑりさをわか方へなし候、太刀も主人へハ、御左の」かた少すちかへ間半程あいをおきて、さて御礼を申候、

一 太刀と小袖を人に遣にハ、先小袖を渡て後に太刀をハわた」すへきなり、

一 弓場にて御太刀など給候事、常にかハる事なし、いつもの」ことくなるへし、

一 立砂又橘の木の有庭にて馬請取渡事、是も別に」かハる事なし、

一 三間五間馬屋に馬をつなく様、次第は有間敷也、何も」所ハ同前也、奥はしとてかハる事なし、禁裏様御馬ハはし」賞翫と也、さてハ中れうの馬と申也、又五間七間御馬」屋のうち上下の事、御秘蔵の御馬ハ御らんせらるゝ、御左の」方につなかるゝ也、其次ハ一をくの方也、次第如此、龍の御馬と申、」禁裏の御馬を申也、

一 馬屋の馬をミて、此馬いか程せめ候と人の問候事、当流に」無之、

一 暮せむると云ハ、七日馬をせむるを云也、二暮と云ハ、」二七日せむるを云也、

一 一手しとう懸て置やうなし、座敷へ行時の事も別にかハる」事なし、

打 足  
刀 中  
を小  
持者 小の  
者役

中 中ハ  
問手 問リ  
あ カ  
き へ

碎 碎  
者 弓  
者 者  
同 者  
付 付  
る 付

々 々

ぎあ手難  
色 色  
難 難  
色 色  
難 難  
色 色

小 中  
太中 中  
刀問 太中  
刀問 刀問

馬

同

殿者

か

の

殿

半

同

半

同

同

半

同

同

朱印

小者

馬

笠袋

同

房長刀持はり  
かへとつかうへし 手あき

小者

中間

中間

同

同

同

打刀

小太刀

小者三人時ハ如此、三人ならひて行也、沓足半の役まん中を行也、此沓足半役の所へ扇持小者行へし、小者兩人の時ハ、此図の「ことくにて、まん中の小者ハなし、房一人の時ハまん中を行へし、」式將の時ハ、長道具ハ跡に不可持也、京中にて八幡などへハ」持せても不苦也、

一扇持小者の事、沓足半の役の小者の跡に行へし、右の「かた也、

一軍陣にて馬を引と云事、嫌て書状などに將書事、当流に「不用之引

と云事、不可嫌也、

ヒクトヨム

一主人へ当座に鞭などに木竹を切て参事、一向あるましき」事なり、

一切付穴・ウズ穴・はるひ穴、はるひとをしと云、

一車よせのそハのつまとをハ、平人ハとをらさる也、乍去若通」事あ

らハ、我右の方の脇をとをるへし、出時も入時も我右の「方の脇な

るへし、貴人真中を御とをりある故也、古実と云々、

一立砂と云事ハ、其かとある人のおかる、事也、人によるへし、「口

伝云、天地陰陽ヲカタトル儀也、左ハ火、右ハ水也、妻戸ノ脇ノ」

スキレンシモ水ヲカタトル心得アリ、くてんあり、

霞殿ニアリ

一から戸の事、撰家・公方様・清花ならてハ御さたなきなり、「から

戸をハ平人ハ不申及、撰家の御衆も御とをりある事まれ」なり、其

子細ハ行幸の御時、主上御とをりあるによりて、誰々も「通路なき

なり、秘説也、又寺かたにあるハ、本尊のかうをもつての」儀也是

一房に長刀持する時ハ、はりかへとつかうへし、又ハまん中をも」行

へし、又小者三人の時ハ、

小者

小者 小者

小者 如此三人ならひて行也、四人の時ハ 如此行也

小者 又房兩人もめし具也、其時ハならひて行、左の方を行は」長刀をか

つきて行へし、右を行ハ手あき也、

一弓袋はりかへハ中半太刀のさきに有へし、長刀と対へし、

沓足半役

扇

ハリカへ袋二人

弓ウツホ付

中半太刀

小者

小者

中間

同

雑色

中間

既者



ハ各別也、

一 御かうしの間をハ、平人ハとをり候てもくるしからず、貴人ハ「御とをり候事なし、

一 御酌の時まへわたりと云事、むすふと云事不用之、

一 踐祚ハ、親王内裏へうつり給ふを申也、

一 なまきんたちとハ、摂家・清花・大臣に御成候人の若公を申「なり、なまくのきんたちとも申也、自余の衆のハ申へからず、」大臣のをと申と云、

一 任槐とハ、内大臣になり給ふを申也、されハ内大臣になり給ふ」所にハゑんしゆの木を植られける也、

一 鶴鴻をかくるやうの事、足をおり、縄にて両をかけて結、一「もちらかし、其を鳥の後より胸へ両なからかけて、向にて男」むすひにするかけ様ハ、縄にてくほねと羽かいと一に引よせて、」向にてまむすひにして、あい六寸おきて、男結にして三ふせ」おひてきる也、田物ハ腹を上にて成て人にも渡也、山の鳥ハうつ」むけて渡也、開口何も上に成、人にも渡へし、射鳥ハ矢目を」上に成、人にも渡也、右手にて持へし、

一 白鳥をかくる事同前、人に渡様、右手にてかけそを持て、右の「膝に置いて、足を左手にて持てあくる也、一段とおもきものなる」ゆへに、左の手にて足を持事秘事也、渡時も如此也、

一 式の進物とハ、御太刀一腰・御弓・御征矢・御鎧・」御馬、以上五色也、

一 皇帝の筆の絵を目録に書にハ、皇帝御筆と書へし、

一 殿中御酒の御時、初献にハ御くわへ不出也、一献の時の事也、

一 御鞠の時御懇御銚子参事、公方様并摂家御衆又」門跡など御参会

にて御鞠の時ハ、懸の両方の頭に上主」御座候、其時ハ両方へ御盆参也、四方にすはるへし、又御折も」両方へ二合つ、参也、又台物御食籠も参へし、御四方に」すはるへし、御酌ハ事によりてつくはうてすへし、軒の事ハ申に」およハす、懸の中木の間通事あるへからず、外をとをるへし、」平ハの時ハ、銚子の上に盃をすへて持て出て参事も有」へし、御銚子ハ平中門より可出也、

一式三献之事、

一 三盃くミつけあり

前二うちミ鯉四豎五横

三あつもの鯉かしらにて

右如此すへへし、銚子ハ白片口なるへし、加ハなし、若出ともくわへ」さる也、御成の時御前はかり参也、御手かけハ三盃のすはる」御膳の通へ参也、よめ入の時ハ、男の前へも女の前へもすはる」へし、自余ハた、一前はかり也、あかる時ハ三よりあけへし、」式三献参様の事、一の御せんまいり候て、二三と公方様の」御右へならへ申よし、入道殿承候、女中衆

三

一 如此被参候よし同前也

二

一 中央の卓ハ、押板の真中一こまいさきへ出して置也、其上にハ」香炉を置也、卓の下にハ香合を置へし、又卓上にハ風鈴」あり、是ハ夏あり、又秋までも又被置也、

一 絵一幅の時ハ上をつ、まさる也、三幅一対の時ハ上を包て盆に」すゆる也、

一 さうしの上にふんちんを置時ハ文沈と云へし、なら紙の上に」置時

シチン  
は紙沈と云也、衣裳の上に置事あり、其時ハ衣沈と」云なり、所に

より名かハるへし、しよゑんのかさりのときハ、すミ」と、めと云

へし、いづれもふんちんの事也、

一くわんせうハ、四季ともにかゝるへし、

一つりふねハ、四月五月六月のあひたはかりつるものなり、

一銅赤台と云、鏡をかくる也、かんやうきうの時焼たる鏡也、」又柄

本ノマ、  
か、ミなどかくるハ相違云々、

一御具足進上の時甲のからミやう、袖を如常付てしのひの」を、取て、

わたかミへかけて、とうたてのしんのうしろへ両方のを、」取ちか

へて、前へまハして、さてそれをうしろのをへかけて、さて」前へ

取てむすひてとむへし、

一長刀人に出事、惣別様の長くそく、人に出事ハなき事」なり、乍

去若出すへきにいたりてハ、右の手にて刃のかたを」上に成て、ひ

つさけて持、右の脇に刃のかたを我ミのかたへ成て、」下に置いてわ

たすへし、所ひろくハ太刀のことに渡也、又刃の」かたを下に成

て、座敷に所可然さい所に立ても置也、

一あかおとしとハ、惣の毛くれなひ也、さねかしらも赤をあか」おと

しと云なり、

一卯花威ハ惣の毛白糸也、ひしとはしぬいとハもよきなり、

一小梅ハ惣白いと、ひしとはしぬいとハくれなひ也、

一棟索目とハ、色々をすちかへておとしたるを云なり、

一鳩カシトリおとしとハ、から鳥の羽のことくおとしたるを云也、

一火緋と犬ハ非也威とハ、惣の毛赤さねかしら、白かねにてしたるを、ひうほと

し」といふ也、ヒ魚ノ頭ナラヘタルニ似ト云々、

一肩白ハ、かたしろくおとしたるを云也、

シナカワ  
一品革 威とハ、関東にしなかわと云所よりいつるかわにておとし」  
たるを云也、色々にそめたるかわ也、

ムラサキスソコ  
一紫齊濃 とハ、惣の毛紫の糸にておとし、すそハ紺にておと

し」たるを云也、むらさきすそこん也、

一ひやうこくさりの太刀とハ、太刀のあしを白かねをひらめて、」よ

ほうにしてと革とにてつくる也、さやハ黒漆也、つはハようを」入

たる也、しときつはと云也、是をおりいれつはといふなり、又」し

ろかねをほそくして、くさりてもする 尻鞆シリサヤ

一和哥会の時、くわいしハ下輩よりはやく文台に置なり、」置様ハふ

んたいの右の脇の端に置へし、其次人前に」置たるくわいしを、奥

へおしやりて、又端に置也、まつくわいしを」巻て、上を少折て右

の袖に入て持て、出さまにはしつくりを」そとひろけてみる也、見

すもあらず、見もせぬと云心也、」さて持て立、文台に向て置也、

一短冊ハ、上首次第に硯の蓋に被置也、右の手にて置なり、取」時も

上首したいに被取也、左のてにて取て、そと明かけて」題を見やう

にすへし、さて右へ取わたして懷中して立也、」短冊のおりやうハ、

名のりのかたを上にかさぬる也、不書時も書」ても名乗の上にかさ

ぬる也、

一花の枝にたんざくを付る事、貴人へ参するにハ、一上の」枝にむす

ひ付る也、同輩へハ枝の中段、下手へハ枝の本の」本枝にむすひ付

る也、結様ハ順也、右をよへまハすへし、返哥の」時ハ、左をよへ

まハすへし、さりながら何とむすひたるも不苦」なり、

一短冊ハ、名乗のかたを上になして、一二に持て、さて又三におるへ

し、」おりたるはしのかたを上になすへし、さてむすふ也、

一返哥の時五もしを取事、上たる人にとる事「かうなき事也、」いつれにても取事不苦、上下カミシモによらざる也、又調伏の哥など「かく事五もしを取也、すみをうすくかきて、又七もしなどの字」つゝく所をすみをこく書事口伝あり、五もしを取事くひきる」なり、

一軍陣にて主君に物申時、甲をぬき、左のわたかみにしのひの「緒をかけてむすひて、うしろのかたへやかて物を申へし、罷立」時ハ甲を左の手にて持、かたにきたることくもたせて立也、これを「たかひもにかくると云也、

一櫛ハシニライ 芍ハシニライと云ハ、一二紫二、二茜、三紅梅、四黄色也、裳ツマニラヒ句 ト云ハ、一二「青キ色、一二黄色、三赤色、四白色、五黒色、是ヲ青黄赤白」黒ト云也、

一間色ヒマイロ 威事、色々ニ加テ威ス也、此レハ龍ノ鱗ヲ表也、紫威者」主人旗差不可着之、其故者、紫ノ色ハ赤ト黒也、赤ハ火ノ色、」黒者水ノ色也、水剋火也、然トモ水与火和平ノ色也、無キ為スルモノ 敵故ニ無」為ノ色也、又萌黄モヘキ者間色也、青ト黄木剋土ノ故、然木与土」和平ノ色ノ故ニ無為色也、故不可禁之、

一勅書、後奈良院万松院殿江被進ナサ 十二天文四十四

理性院僧正申候大元料所の事、これは自余にこんし候」ハぬ事にて、七百年以来、いまに応仁の乱にもかたのことく」退転なく、小法の分にてもおこなひきたり候事にて候、当年ハ」いさ、か御修法のまねかたも万本ノマ 願にて候之処に、かやうに」いはれなくおとされ候へハ、たちまち閑怠に及候ハんする、」なけき入候、これハ天下そうへち他にことなるいのりにて候を、」此時にいたりてすておかれ候へき事、公武のためいか、と、斟酌を」かへりミす申述候、是非

ともに押領なきやうに、はやく嚴密の」下知をくハへられ候へく候、国家のためさしおきかたくて」染筆候也、あなかしく、

御料高一かさね 御料低一かさね 御ちらしかき也

室町とのへ

一勅書御請御案文天文四十二十四御料高紙一かさね

就理性院知行之儀。 勅書旨謹拝見、先以。畏存候、応」勅裁御。請申候、仍御太刀一腰。令進上之段、宜被申入之状」如件、

十二月十四日

義晴御判

両伝 奏中

御上書如常墨長被引、御名字在之、

朱印

大和家藏書十一

〔表紙表題〕「大和家藏書 十一」

中表紙

〔付箋〕「大和守晴完入道宗想筆記 三止」

〔朱印「明倫館藏」〕（朱印「安政七改」）（朱印「明治十四年改」）

諸家へ目録可調様之事

一 公方様大上らふ并小上臈へ御樽以下參候時、目録「かくへきやうの事、しん上とハあるへからず、如常もく」ろくをかなにかきておくに、名乗かたに名字くわんを「かくへし、中臈へハ名乗官はかりかくへし、但又か、」さるも不苦也、

一 三職へ馬太刀、又ハ鳥目樽以下可進時目録書様事、「進上とハあるへからず、御太刀一腰・御馬一疋如此、御字」一字ハ草、一字ハ真に書へし、此段ハ三職にかきりて」の故実也、又其外折樽も御の字同前、次鳥目の事、「折紙にハ或ハ鳥目、或ハ青銅など、ハか、すして、千疋」式千疋ともその員数を書へし、奥に名乗、かたに名字「官を書へし、但人により進献とはしにかきて、さてその」色をかくへし、た、の御相伴衆へハ不可在之也、書状ニハ「鳥目千疋・青銅千疋・鵝眼千疋などかく也、書状にも」いんしゆハかり書事も又勿論也、

一 此外御紋の御相伴衆への事、大かいハ同前之様ニこれ「ありといへとも、三職の儀は公私一段御賞翫の事ニ候」間、右に申ことくたるへし、御紋の大名へハ、御太刀・御馬」など御字をハ書へからず、太刀一腰・馬一疋など、あるへし、」但太刀・馬二色の内一色にハ御字を付候事故実也、」然ハ御太刀一腰・馬一疋などたるへし、次

折樽同前、おくは「名乗かたに名字官を書へし、何も人によるへし、次御紋」せられさる大名への事、かやうの儀ハ、御紋せられ候大名へ」と同前たるへく候、少ハせうれつあるへし、仁鉢によるへし、一 公家方への目録の事

撰家へハ進上と書へき事勿論たり、雖然進献と「書事も故実也、又はしかきハなくて、おくの名乗のわき」に上文字書事、進上と書たるほどの心得也云々、」たとへハ

宮内太輔晴完上

公家かたへハ、名字官までハなくとも、官に名乗をかき「つ、けて如此可然也、惣別公家方ニハ、我と称号<sup>名乗</sup>事也」を書あらハす事ハ、自由のやうにこれあり、然ハ公家」方におひても、近衛殿をはしめ奉りて、撰家への御儀」如此也、其外ハ目録までにて、おくの名のわきに上文字」など書におよハす也、何も官名乗ハ、可在之事可然也、」又おくに名乗、かたに名字官もかくへし、清花又は「大中納言の御衆へハ、進上とハあるへからず、おくハ名乗、」かたに名字官書へし、但大臣に御成候者、進献と可書也、」清花へも同前也、

一 門跡方への事、

梶井殿 青蓮院殿 妙法院殿 聖護院殿 大覚寺殿」など申たくひへの事、撰家可為同前也、

一 伏見殿 常磐井殿 御室などへも撰家同前たるへし、」猶以御礼儀ふかく可心得也、

一 勧修寺殿 広橋殿 日野殿 其外の公家衆へハ、はし」かきをハか、すして、如常目録をかきて、おくハ名乗、かたに」名字官あるへし、

雑々

きよちう

一 三職女中の事、御中と申候段故実候、むかしの右馬頭殿」号禪昌院などハ、上様をも御中様と被申候し、三職已下」大名女中をハ、何も御中と可申段尤可然云々、さまの字を」のそきての儀也、女中様とも三職の事ハ申ても可然云々、」御女中とハ不可申候、

一 掃部頭・右馬頭官の事、此時ハ法牀しても頭と云字を」書へき也、たとへハ掃部頭入道殿・右馬頭入道殿と書状」にも調へき也、此頭の事、賞翫なるゆへに如此なり、又受領」の内奥陸守入道殿と書へし、其外の受領ハ山城入道殿」などかくへき也、

一 折を御座敷へ出ニハ、まつまのうちうの折を出すへし、」精進をさきに出也、その次ニハきそくを出すへし、きそくハ」箸をすゆるにおよハさる也、二ならへて参へし、折ハもとハ」一参る也、二まいり候事ハ近代の事也、

一 折の参事、二献目三献めより参也、又初献にも参」へし、時宜によるへし、

一 折のとちめの事、台の閉目ハ貴人の向に成へし、」折のとちめハ貴人の方に向也、さりなからいつかたへ向」てもくるしからす云々、

一 御盃の台の時御酌覚悟の事、かならず御調子を」下におきて、台をまつ持てまいる也、御しきたいの時も、」たいを持てまいり候て、さて御調子を持て参候、人の」御前へ参へし、台の前を御前へむけて参へし、

一 御前にて御酌の時、ひさをたて、も居へし、又つくはい」ても不苦候、御能などの時ハ、殊更久敷あひた左の」ひさをもたて、又ハ右をもたて、くつろくやうにすへし、」并御ひさけの時ハ、くわへ申候時、ひさけのふちに手を」そへてくわへたるよろしと云々、

一 御樽目録調へき事、鳥を先前に書也、其後魚を書、」精進ハ後に書

へし、惣別もとくハ精進ハ進上なき事也、

一 撰家并清花の御衆きこしめし候御盃ハ、四方にすハる」へし、御まいり候て、其盃を三職其外御相伴衆以下」御給候時ハ、手にすへて可参也、かりそめも四方にすへ」へからす、若すハる事あらハ、御四方をいかにもおし」のけて、其御盃をたまハるへし、

一 段子又きんらんなど、或ハ盆にすへ、或ハ台にすへ、人に」出すにハ、巻目をいたす人のかたへなすへし、引合一かさね」にても、二端も三端もあれ、一につ、ミで、上を水ひき」にて結て、ほんにも台にもすゆる也、出す時ハかならず」まきめを人のかたへ成て出へきなり、上をつ、むも巻たる」ことくに包也、はしを少おしかへすへし云々、

一 盆又ハかうはこ人にいたす時ハ、花鳥なども人にあるハ、」鳥ハあしのかたを人のかたへなすへし、花ハ本人のかたへなす」へし、いづれも此心得あるへし、

一 かうろを人にわたすにハ、あしを渡人のかたへ一なして」わたすへし、

一 すえひろかりの扇を十本人に出にハ、ひろきかたを五本」つ、一方に成て結也、さてうら地かへて、骨の中を二所」はかり金銀のかミよりにて下をゆい候、一方へ五本つ、にして、」下をかさねて、さて金銀のつ、ミかミにてかうよりも、金銀の」にて中を如常結て、やないはにすへてまいらするなり、」やないはにかけてあふきをむすひ付也、又台をこしらへ」てもすへし、つ、ミやうハ、つ、ミ紙一かさねにて、両方へ」すへひろかり候かたを成て、ほねの中をつ、む也、かうつ、ミ」などのことくはしをおり候也、鳥の子又引合なとにても」つ、むへし、今此つ、ミやうしりたる人もあるまし

く候也、

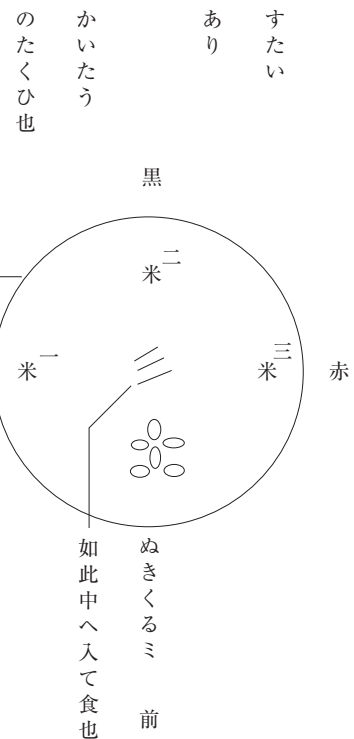
一 御服を人にくたさる、時わたすへき覚悟の事、御ひろ」ふたにすへし、御下かへの方を上にて成て、二にかいおりて、「御袖をハおり入て、御糸りと袖のあいたを渡人のかたへ」さしむけて、御ひろふたともに渡すへし、下におきわたす」なり、さるかくなとにハ、御ひろふたよりとりてもわたす」へし、勢州貞孝朝臣此分也、又大館奥州晴光朝臣ハ、た、ミやうハ、おなし御糸りをわたす人の右のかたへ成て」渡す也、

一 太刀と刀、人に出す時ハ、太刀ハかたなの上たる由晴光朝臣ハ」被申し也、伊勢守貞孝ハ、太刀の上に刀ハあるへし、然ハ小刀」さし上に成候間、かりそめも人に太刀刀を出時ハ、小刀を」さして出すよきと申儀也、

一 草花を人におくるへきにハ、必引合又鳥子あるひは」金銀の紙にてつ、む也、囊やう一かさねをすミかけており、「蝶のこつく両方ひきよせて折て、もとをつ、むへし、花に」よりて一尺計ももとをおきつ、むへし、下をもとゆひにて」二重にゆいて、其上をつ、ミて、水引にて結也、常のこつく」わなにすへし、花のさき二所はかりをゆいたるよし、喝食へ」おくるへき花の事、仙翁花・菊・せきちく・水仙花・」しやくやく・夏菊、大かた此分也、木ハ本をつ、まさる也、」牡丹・梅・かいたうなどハおくるへし、俗などへハ梅・」女郎花なども送へし、ひめゆりも喝食へおくるへし、」昏のひろきかた、花の本のかたへ成へし、

一 三ほうせんの事

しろきハかのかわをへうしたる也、黒ハいのかわを表たる也、赤ハひつしのかわをへうしたる也、



かやうに赤白黒三色あり、さきのくろきをはしにて、かハ」らけの中へ一二三おろし、さて前のかたにあるくるミを」食へし、此くろきを食たるもよし、さきにハすさいあり、」とつさかのり也、又此三色を、一つ、かハらけの中へおろし、」しるにつけ、さてくいたるもよし云々、

一 公方様御連哥の時、御くわいしにハ其当御官を書申」へき也、たとへハ宰相中将殿、又ハ大納言殿此趣也、又御」月次などに、桐字一字か、せられたる御事も有之、

一 公家衆宰相とあるハ三儀也、又儀同三司とハ、大臣に」准すると云心也、内大臣と大納言の間の官也、

一 公家衆ハ、書状にハ名乗はかり御調候、さけたるかたへは、」上書の名乗の所に判形を御さた候、それよりもさけ」たるかたへハ、二合と御書候、是なのりの心なり、

一令進覽候とかく事、此令とかく事ハ一かと賞翫の心」なり、

一春日殿御局、又春日御局とも書へき事勿論也、又か様」にも可申也、

一女房衆のかたへ御文など参候時、うらに名字官、かなに」すぐに書へし、名字わきにかくハわろし、

一春日の御局まいる申給へとかくハ、人々御中とかき候と同前」なり、

又ハ左京大夫の御局まいる申給へ、かやうにある同前也、」又入江殿にてハ、永久庵御りやうまいる申給へなど書ハ同し」事なり、しやうくハんのかきやう也、

一惣持院殿しゆしやうけんへの御文ハ、しゆしやうけんとのへ」御りやうへまいる申給へと有之也、

一御相伴の大名より刀など給候ハ、則うけとりてつきの」さしきへ罷立てさすへし、又さ、さるきもあるへし、わか」さし候たる刀ハ内ものにもたすへし、又我さしたる刀をも」進之事も可在之、公方様へもわかしたる刀進上申事」在之、

一文の上つ、ミ、ひねらすしておりてはかりおく事、御内書」にハそのふん也、引合小高などの時ハ、上つ、ミ上下ひねりて」上にすミを引也、た、の人ハ、ひねらておく事ハ自由の」事なり、

一ふミのうちに誰々可申候とかく事、名字官書事ハ、相手」同輩の時の事也、名乗をかくハ相手を賞翫也、御内書」にハ又かハる事也、

一書状の上を杉原などにてつ、ミ候事ハ、人によるへきなり、」上々の御書などハ、上をつ、む也、其外ハ如何、

一拙者と書と我等と書ハ、我等とかく事ハひけして書」なり、

一従晴元大館奥州へ被相尋時、如此被注進之、

本願寺殿へ御書御事、既禁裏様より被成申門跡、公方様」其御心得上者、浄土寺殿・三宝院殿・実相院殿、此御衆程に」被成御心得候、

あて所書可然御座候哉由存候、大心院殿御書」御案文大略右趣にて御座候、宮門跡ハ又そのかと御入候」事候、あそハしとめられ御所ハ、此等之趣得其意可被申候、」恐々謹言、如此可有御座哉と存候、今度可為門跡之旨、依 叡慮、為礼太刀一腰吉綱・」青銅万疋給之候、目出候、猶宗薫可申候也、恐々謹言、

十二月廿八日 義輝御判

本願寺殿

一公方様江初雁一進。上仕候、此等之趣可。然之様御披露」所仰候、恐惶謹言、

永祿二

九月十三日 左衛門督義景判

進上大館陸奥守殿

上書

進上大館陸奥守殿 左衛門督義景

半切鳥子らいし如常 うらかき朝倉

惠林院殿御自筆

一就移座之儀、祈祷。卷数到来、尤神妙。、近日可帰洛之条、」弥可。抽精誠候也、

六月廿八日 御判

巢林庵

義輝  
御自筆

一就移座之儀、合躰絵像并刀八毗沙門頂戴候、近日可」入洛之条、弥可抽懇祈候也、

十二月十九日 御判

巢林庵

一安楽寿院領山城。国竹田内深草新免。事、付惣庄」可有 御管。領候也、恐惶敬白、

至徳元年

鹿苑院殿

十月廿八日

御判

常磐井殿

一太神宮領美濃国福永。御厨年貢事、任先例。可究」済之旨、可相触。名主沙汰人等之状。如件、

永禄七年二月十七日

御判

祭主とのへ

上囊同杉原也、又上つ、ミ御判物迄通 貞広

御判日下 二月十七日 御沙汰始例年如此御文言也、

一三宝山殿・本願寺殿へ御太刀可参事、申次人へ先」可渡之由申て、た、直にと候ハ、直に可参也、

中御門殿へ院宣也

一朝恩地并家領記六、悉。譲与頭弁之由、被聴食畢。」不可有相違者、

。院御気色所候也、仍執達。如件、

応永廿一年九月十一日 権大納言判

謹上 新中納言殿

万松院殿様

一白鳥到来喜入候。、殊於甲賀伴助七射取。由候、尤以無」比類覚候、猶。植綱可申候也、

十月廿日

御判

佐々木弾正少弼とのへ

一撰家へ御樽以下目録可調事、撰家へハ進上とはしに」かきて、如常

もくろく可書之、以上のおくにハ、名乗かたに、」名字官を書へし、

清花大中納言へハ、進上とハあるへからず、」おくハ右同前、但大臣に御成候ハ、進献と可有之、清花へも」同前也、

一三門跡と申ハ、青蓮院殿・梶井殿・妙法院殿也、三門の」座主まはり、御持候也、何も宮門跡也、梨本坊と申ハ、」梶井殿御事也、

梨本殿と申云々、

一三井寺門跡ハ、聖護院殿 円満院殿 実相院殿、」此分也、

一醍醐三門跡 理性院 金剛王院 三宝山、

一東寺門跡ハ、随心院、

一法中官位次第 大僧正 僧正 権僧正 法印大僧都」法印権大僧

都 大僧都 権大僧都 少僧都」権少僧都 法眼 権律師 大法

師

一院宣ハ院の執権被調之、大中納言の衆也、縦ハ、

日野家 勸修寺家 三条家也、綸旨ハ貫首被調之、

四位の敷事也、藏人、五位敷事調之、藏人同之、

一院御所にてめさる、御狩衣ハ、かんの御衣と申也、<sup>ラン</sup>

一五位の時ハ大夫と云也、

八十二人禁中内間 八十一人禁中外間

一女御ハ后也、更衣ハ禁中女中達の事也、斎宮の女御とハ、伊勢へ

后ヲ王より被参也、皇子也、

めしくせられ候を申也、

一東宮とハ、東宮坊と申て、主上御跡統の御座候也、太子の」御座候

を申也、東庭とも申也、

一仙洞とハ、院の御座候を申也、

一執柄とハ、関白の御事也、撰家の御上也、



一位をハ叙と云、官ハ任と云、職ハ補と云也、  
一隼人<sup>セウ</sup>佑、

一半家と申ハ、清化也、

一開発領主とハ、昔より至于今、無相違知行を云也、

一御下文とハ、御教書の下にて右筆調之、奉行の事也、

一六親と云ハ、父母兄弟夫妻是也、三族と云ハ、父族「母族也、  
ヤシハラウチ ヒラウチ ラウチ シンフ ヲノカミ

一九族と云ハ、高祖父 曾祖父 祖父 親父 己身」 子<sup>コ</sup>孫<sup>マコ</sup>  
ヒマコ ヤシハコ

曾孫 玄孫 是を九族と云り、

一他人又親類を子にするを養子と云、

一兄弟の子を子にするを猶子と云、猶<sup>レ</sup>子トヨム

一伯叔の子をも猶子と云、左伝云、

一他人を養子にするを違法養子と云、十五以前に養子を「する事更無  
法意、

一座敷ハ左の方賞翫也、右の方主人居也、

一饅頭・魚・鳥・昆布など目録に調時ハ、一番饅頭・鳥・魚、」さて  
奥に昆布をハかくへき也、

一海老と貝の類ハ、先海老をかきて、其次に貝をハかくへきなり、  
一御ねりぬきの代ハ一重<sup>イツチウ</sup> 三百疋也、二重ハ六百疋也、一重ハ「かす  
二也、

一小袖の次第 一御から 一御織物 一御ぬい」 一<sup>はく</sup>こうはい 一御なり  
すち 一そめ小袖 一御はた」 以上、

一小太刀ハ一腰と書也、一振と書事ハ中半太刀、長き」野太刀など大  
なるを一振と書へし、はかれましき太刀ハ、」何も一振可然云々、  
又よそより太刀一腰進之など之者、」此方より太刀一振なども調  
之、

一制札之調様の事

禁制

寺号院号付境内

右、軍勢甲乙人等寄宿事、一切被停止訖、若有令」違犯之輩者、速  
可被処罪科之由、所被仰下也、仍」下知如件、

永正十三年六月二日

前丹後守平朝臣判

近江守三善朝臣判

禁制

同———

一軍勢甲乙人等乱入狼藉事、

一伐採竹木事、

一相懸兵糧以下課役事付寄宿事、

右条々、堅被停止畢、若有違犯之輩者、速可被」処罪科之由、所被  
仰下也、仍下知如件、

年号月日

———

———

———

———

過書可調様の事

御料所河州十七ヶ所公用米式千斛連々可運送云々、」河上諸関無其  
煩可勘過之由、所被仰下也、仍下知」如件、

年号月日

———

———

———

伊勢国下向卅人<sup>荷物</sup>荷物 在之興<sup>一疋</sup>一疋、諸関渡上下」無其煩可勘過之由、

所被仰下也、仍下知如件、

年号月日

壁書

——申

右子細者、丹波国船井郡内田地五段事、当知行無」相違者也、若於致訴訟輩在之者、尋承為子細於申披、」仍壁書如件、

年号月日計也、

政所方安堵御下知調樣

山城国松崎内田地五段別錄<sup>在紙</sup>等事、帶証文、買徳相伝」任当知行之旨、弥領知不可有相違之由、所被仰下也、」仍執達如件、

年号月日

受領

伊勢守

吉田帶刀左衛門尉殿

問狀奉書調樣日数七日之間也

山田与三長治申知行城州西院内田地三段事、違乱之」云々、太無謂、所詮任証文之旨、可被成奉書、若又有子細者、」可被明申由、被仰出候也、仍執達如件、

奉行兩人

五月十日

——

高岡三郎殿

一為 若公様御誕生之御礼。、御太刀一腰<sup>実吉</sup>・鳥目。万疋」進上仕候、以此旨可令。披露給候、義隆恐惶謹言、

十一月五日

大宰大式義隆上

進上 伊勢兵庫助殿

進上<sup>上書</sup> 伊勢兵庫助殿

礼紙在上つ、ミ、大宰大式義隆上

一公方様江為年始御礼、御太刀一腰持・鸞眼參千疋進上」仕候、此由可然之様、御披露所仰候、恐惶謹言、

二月廿日

孝景判

進上 武田大膳大夫殿

杉原立紙一枚にて調之、礼紙如常、上包在之

うらかき 朝倉彈正左衛門尉

一去六日至池田及合戰得大利候、本望候、則堺之儀可加」退治候、被得其意、諸事馳走可為喜悅候、猶正盛可」申候、恐々謹言、

三月十二日

常桓判

五ヶ番衆中

一御書之趣具令拝見候、殊於所々被得軍利之由、尤」珍重之至候、各聊不存疎略之旨、宜預御披露候、恐々」謹言、

三月十七日

元連判

波々伯部兵庫助殿うら書名字官

從番之返事在之、是ハ三番衆分彦部伊豆守調之<sup>享祿四年</sup>

一就今度山科退治之儀、於。新日吉口被及合戰、敵。数多被」討捕之由 御感候、仍被成。 御内書候、御面目之至候、弥可」被抽忠。節之由、被仰出候、恐々謹言、

八月十七日

晴光判

うらかき 大館左衛門佐

本国寺御坊

一就今度山科御退治之儀、於新日吉口被及合戰、敵数」多被討捕之旨 御感候、仍被成 御内書候、弥可被抽」忠節之由候、恐々謹言、

八月十七日

高信判

立本寺御坊

大館兵庫頭

右両通何も御内書之副状也、天文元年八月十七日從桑実寺也、  
中御門殿へ状案文

一西七条右京職之事、同名又七跡目致出頭之上者、如前々」御公用等  
嚴密可申付候条、被得其意、可有披露候、」猶横川掃部助可申候、  
恐々謹言、

十月十日

田中殿

貞孝  
伊勢守

一就松永員用之儀、御札令拝見候、旧冬之儀者、月迫」旁取乱、無其  
儀候、聊如在有間敷候、猶可得御意候、」恐惶謹言、

二月二日

信豊判

右馬頭殿人々御中

武田伊豆守

一就御料所筒河庄之儀、御懇示給候、祝着至候、如先々無」相違申付  
儀候条、被成其御意得、可然之様可被仰上」事、可為本望候、恐々  
謹言、

三月廿六日

義清判

武田伊豆守殿進之候

うらかき  
一色

一北面輩之事

近衛殿

進藤

斎藤

一条殿

堀川

西園寺殿

案主

御厩主也

田中

久我殿

本庄

日野殿

松波

山県

烏丸殿

世統

中御門殿

今井

田中

山科殿

大沢左衛門大夫

庭田殿

河端左衛門尉

花山院殿

安芸族

柳原殿

松波

河内

越前

内膳民部少輔

高橋

八北面ニ准せらる、也、

一諸大夫

近衛殿

北小路

二条殿

北小路彈正大弼

久我殿

森

竹内

春日

三条殿

中務權少輔

菊亭殿

善大夫

西園寺殿

森治部少輔

德大寺殿

物加波又物川

九条殿

信濃小路

諸大夫にハ名字無之、上北面とハ諸大夫を云、下北面ハ侍也、

一改嫁事

延徳年中於松村盛秀写之

右、或致所領成敗、或行家中之雜事、於令現形者、尤可有」其誠、

此外至内々蜜儀者、縦雖有風聞之説、非沙汰之限、

一有新儀政」其国不レ穩

馬場御成敗之時、右筆方此語ヲ引言上

一勢州より武田殿へ御宿所、赤松殿謹上書也、又ハ人々御中、近衛  
殿 可令披露給候被調之、惣別御披露」とハ、公方様より外ニハ  
不可在之、

書札礼事

某頓首

誠 恐

謹 言

某誠恐謹言

某恐惶謹言」某謹言

恐謹言

恐惶謹言」

恐々謹言

謹言

以上次第此分候、謹

言

と候ハ、謹言ノ真ナル也、

一某とハ我名の事候、某と候所に名二字あるへく候、

一可被之状如件とハ、謹言とかき候も猶過分なる方へ、状如件」にて

書とめ候、但内状にハまれに候、状如件と書候程の方へは、」謹言

と書候、御教書にハかならず状如件にて候、

キヨ

一 居所とハ、其人の称号なにかし殿の事候、武家にハ名字と」申候、公家にハ、名字とハなのりの事候、此礼の一冊にも名字」と候ハ、なのりの事候、法名同事候、

官

一家司名とハ、被官の名をかき候事候、或子息とハ、子の」名を書候、是も直札を恐候にて候、

一 奉書とハ、直に遣候ハて、家司の奉にて申遣候状の事候、

アデ

一 上所とハ、状の奥にも、うハかきにも、称号の上に進上・謹々」

上・謹上など書候事、これハ内状にハ書候ハす候、御教書に」書候、無上所とハ、これを書候ハぬにて候、

一言上如件 上啓如件 執啓如件 執達如件、以上これハ」御教書にかき候、内状にハ書候ハす候、

一 判とハ、なのりをかき候ハ過分なる程の方へ判を書候、凡」名のりと判と書候事ハ、候ハぬ事候、其謂ハ、判ハなのりの」草なるにて候、されハ二かさねて書候へき事にてハ候ハす候、

一 執柄とハ関白、参議とハ宰相、雲客とハ殿上人の事」にて候、

一 弘安八年に礼を定られ候程に、これを弘安礼と申て、」諸家ミな用之候、

一 如此礼ハさたまり候へとも、大中納言より殿上人にも恐々」謹言なと内状に書候、非分の事候、或家勢、或師匠」にハ、一段上の礼を書候、師匠とハ、哥・鞠にても、何事の」道にても、其家風をうけ候事にて候、

一 僧中礼之事、

一 僧正可准参議とハ、参議の礼を僧正にハ用にて候、以下」可准知、

一 凡僧とハ妻子あるにて候、さ候へとも、当時其門室により候」へき

にて候、子細在別紙、

本ノマ、

一 法印まで成候も、山・三井寺・東大寺・興福寺諸寺の住侶」などハ地下の准にて、殿上人の礼をハ書候ハす候、公家等輩の俗」性の門室諸門跡出世分ハ、殿上人の准候、坊官ハ法印になり候」とも、四位殿上人の准にてハ候ましく候、地下の諸大夫の准たるへく候、

一 法師の、大納言とも中納言とも名に付候ハ、仮名とて、おやの」官を付候てよひ候にて候、法師の其官の成たるにてハ候ハす候、」大納言法印・中納言律師など、其外俗の官を付候て」よひ候ハ、其父の官をつけ候てよひ候心にて候、さ候程に」父なり候ハぬ程の人、過分の官を付候てよひ候ハ不可然候」事候、子細を不知にて候、侍法師の国名付候までも其心候、」俗の官と法師の名、各別の事候、

権大納言宣胤

一式三献之事

一 三盆くみつけあり

前 二 うちミ鯉四堅五横

三 あつもの鯉かしらにてあけるやうハこれよりあくる也

一の御せんまいり候て、二三と公方様の御右へならへ申候、御銚子ハ」白片口なるへし、御くわへハなし、御手かけハ三盃のすハる」御膳の通へ参也、御成の時御前はかり参也、あかる」時ハ三よりあけへし、女中衆のハ

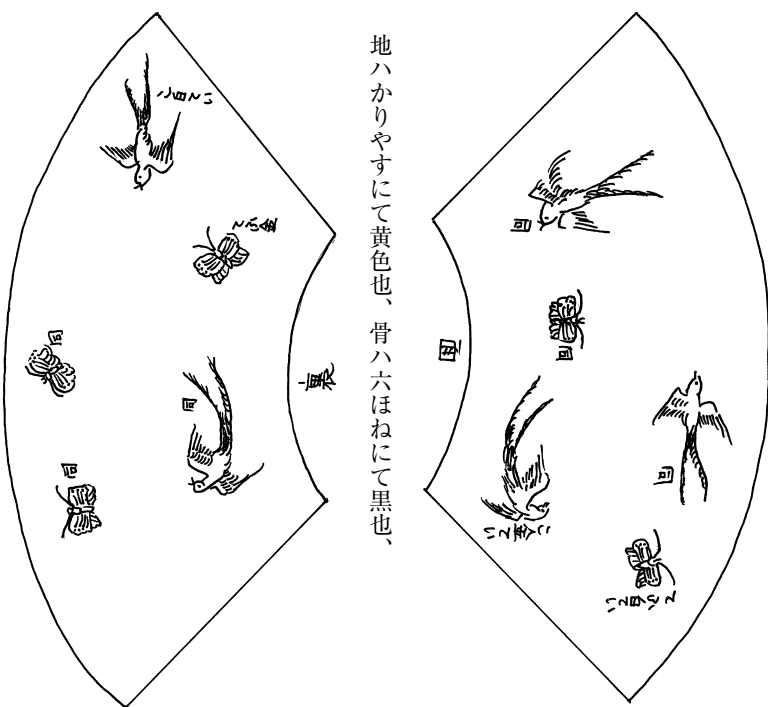
三

一 と如此参也、よめ入の時ハ男のまへ女の前へにもすハるへし

二

一判官彈正少弼の官人持扇の事

地ハかりやすにて黄色也、骨ハ六ほねにて黒也、



一人の女むかへの事、色々申候へ共、先初日より二日までハ、男女」ともにしろき色を着すへし、三日めに色なをしとて、「色ある物を着候、三日にあたる日、男のかたへ女房のかたより」引出物候、男のかたよりハなし、女房達・ひ女などにハ引出物」あるへし、又こしよせたる役人の女房にハ、かならず女中」かたより引出物あるへ

し、

一よめいりの時むねの守の事、こしをよせ候て、こしより御おり」候時、まつおとこのかたより、むねのまほりを取り候よし申候、但」人のしつけにより可相替候哉、

一人の妻むかへの時祝の事、其男ハ白きひた、れ・白き」小袖を可用、こしをよする時、主人よりてこしに手をかけて」退て、女房をハおろす也、侍女はうとて、殿の方の上らう」女房などの寄てかいしやくする也、其夜の祝にハ、殿ハ一所」にてハ座すへからず、へた、りたる方にある也、三日にあたり」たる色なをしとて、殿も女房も色々の装束に成たる」時、殿も女房も一所にて祝也、其時女はうの方よりも、殿のかたよりも引出物ハする也、ひた、れ・大口小袖なり、」女はうのかたへハ御そはかま小袖也、略儀にハ色々の小袖」はかりなり、御かいしやくの女房たち以下御上わうハ、ひちに」下女までも小袖也、数ハ不定也、むかへ始の夜ハ、式の飯を」用也、公家のせつふとて如此物したつる人有也、それにあつ」らふる也、式の御物と云ハ、こわき飯に紙をた、ミで帯に」する也、御しるハあまたあれとも、御こつけとてしるつけたる」御めしを、三も四も追々にまいらす也、ひやしるなどもある也、」いづれもまいらする時、御はしをとりあけらる、まてにて」きこしめさぬ也、追せんの御めし、ミなひめの御めしとていつもの」飯也、一三こんの御酒ハ、つねのことくこれらも御さかつきめすまで」なり、一如此の祝にも、いつものことくに重一合、をき鳥・をき鯉・」へいし一具有へし、當時をき鳥を一つかいするハ不可」然事也、女房むかへに不可用、

一御さかなの時ハ、殿にハ鯉のそう者のひれをまいらせ、女房」にも

おもむきのひれとて、鯉の左のひれをまいらす」なり、

一女房むかへの時ハ、しうとの父の輿を用也、こしよせの役人ハ「白ひた、れなり、しうとのかたの殿原の役也、殿の方より」引出物にハ、馬・太刀・腹巻、力者にも引出物する也、

一しうとの方へ女房のはしめておハします時ハ、殿の父の「輿にめす事也、

一よめいりの供に猿毛の馬にのるへからす、猿皮うつほ付」させず、うみなしの鞍にのらす、故実也、

一式の進物と申ハ、御太刀一腰・御弓・御征矢・「御鎧・御馬、以上五色也、

一殿中一献の時ハ、初献にハ御加ハ出不申候也、

一皇帝の筆の絵を目録に書にハ、皇帝御筆と」書へし、

一踐祚ハ、親王内裏へうつり給ふを申也、

一なまきんたちとハ、摂家の若公を申也、なま／＼のきんたち」とも申也、自余の衆のハ申へからす、大臣のをも申と云説」あり、不可用也、

一任槐とハ、内大臣になり給ふを申也、されハ内大臣になり」給ふ所にハ、えんしゆの木を植られける也、

一御鞠の時御懸御銚子参事、公方様并摂家御衆又ハ「門跡など御参会にて御鞠の時ハ、懸の両方の頭に上主」御座候、其時ハ両方へ御盃参也、御四方にすハるへし、御折も」両方へ参也、台物御食籠も参へし、御四方にすハるへし、「軒の事ハ申におよハす、懸の中木の間通事有へからす、」外をとをるへし、平ハの時ハ、銚子に盃をすへて参事も」あるへし、御しやくハつくはう也、御加も同前也、さ

りなから」時宜によるへし、御銚子ハ平中門より参なり、

一鶴鴻をかくるやうの事、足をおり、縄にて両をかけて結、」一もちらかし、其を鳥のうしろより胸へ両なからかけて、」向にて男むすひにする、かけ様ハ、縄にてくほねと羽かいと」一に引よせて、向にてますひにして、あい六寸置て男結に」して、三ふせ置てきる也、田物ハ腹を上にて成て、人にも渡」なり、山の鳥ハうつむけて渡也、鯛口何も上に成、人にも」渡へし、射鳥ハ矢目を上に成、人にも渡也、右手に持へし、

一白鳥をかくる事同前、人に渡やう、右手にかけそを持て、」右のひさに置て、足を左手にて持てあくる也、一段とおも」き物なるゆへに、左の手にて足持事秘事なり、渡時も」如此也、

一長刀を人に出事、惣別か様の長くそく人に出事ハなき」事也、さりなから若出すへきにいたりてハ、右の手にて刃の方を」上に成て、ひつさけて持、右の脇に刃のかたを我ミのかたへ」成て、下に置てわたすへし、所ひろくハ太刀のことくに渡也、」又刃のかたを下に成て、座敷に所可然さい所に立ても」置なり、

一御具足進上の時、甲のからミやうの事、袖を如常付て、」しのひのを、取て、わたかミへかけて、とうたてのしんの」うしろへ両方のを、取ちかへて、前へまハして、さてそれを」うしろのをへかけて、さて前へとりてむすひてとむへし、

一車よせのそはのつまとをハ、平人ハとをらさるなり、さり」なから若通事あらハ、我右の方の脇を通へし、いつる」時も入時も我右の方の脇なるへし、貴人真中を御とをり」ある故なり、古実也、

一立砂と云事ハ、其かある人のおかる、事也、人によるへし、」其子細ハこしをよせ候に、自然輿などいれ候時おとし」候ハ、立砂

にてか、へへきの用心也、主人をおもんし」ての心也云々、

一から戸の事、撰家公方様ならてハ御さたなき也、から戸」をハ平人ハ申におよハす、撰家の御衆も御とをりある」事ハなし、其子細ハ、行幸の御時、主上入御あるによりて、「誰々も通路なき也、秘説也、又寺かたにあるハ、本覚の」かうを以てから戸をする也、是ハ又各別なり、

一御かうしの間をハ、平人ハとをりてもくるしからず、貴人は「御とをり候事なし、

一御酌の時まへわたりと云事、貴人の御座候前を、一文字に」わきへゆかぬ也、まはりてとをるハくるしからず、一もんしにとをるを」

云也、所々<sup>本ノマ</sup>かやうの事ハくるしからず候、

一和哥の会の時、くわいしハ下輩よりはやく文台に置也、「置様ハ文台の右の脇の端に置へし、其次の人、前に」おきたるくわいしを奥へおしやりて、又端に置也、先くわいしを」巻て、上を少折て、右の袖に入て持て、出さまにはし」つくりをそとひろけて見る也、見すもあらずミもせぬと」云心也、さて持て立、文台に向て置也、

一短冊ハ、上首次第に硯の蓋に被置也、右の手にて置なり、「取時も上首次第に被取也、左の手にて取て、そと明かけて」題を見るやうにすへし、さて右へ取わたして、懐中して立也、「短冊のおりやうハ、名のりのかたを上にかさぬる也、不書時も」又書ても、名乗の方上にかさぬる也、

一二条家と冷泉家との口伝事、冷泉家ハ定家のそりう」なり、二条家ハ家隆也、然ハ二条院の仰を承はられて」二条家と申也、又冷泉家ハ、冷泉院の仰を蒙りて申也、「秘事也、

一花の枝にたんさくを付る事、貴人へ参するにハ、一上の」枝にむす

ひ付る也、同輩へハ枝の中程、下手へハ枝の本の」本枝にむすひ付る也、結様ハ順也、右を上へまハすへし、「返哥にハ、左を上へまハすへし、さりなから何とむすひたるも」くるしからざる也、一たんさくハ、名乗のかたを上になし、二に折て、さて三におる」へし、折たるはしのかたを上になすへし、さてむすふ也、

一返哥の時五もしを取事、上たる人にとる事一向なき事也、「いつれにても取事不苦、上下<sup>カミシモ</sup>によらざる也、又調伏のうた」なとかく事、

五もしを取也、すミをうすくかきて、又七もし」などの字つゝ、く所をすミをこく書事、口伝あり、五もしを」取事くひきる也、

一中央の卓ハ、押板の真中一こまいさきへ出して置也、其上」には香炉を置也、卓の下にハ香合を置へし、又卓上にハ」風鈴あり、是ハ夏あり、又秋までも置也、

一絵一幅の時ハ、上をつゝ、まさる也、三幅一對の時ハ、上を包て」盆にすへ人にも出也、

一さうしの上にふんちんを置時ハ、文沈と云へし、なら昏の」上に置時ハ紙沈<sup>シチン</sup>と云也、衣しやうの上に置事あり、その」時ハ衣沈<sup>イチン</sup>と云也、所により名かハる也、

一しよゑんのかさりの時ハ、すミと、めと云へし、何もふんちんの」事也、

一くわんせうハ、四季ともにかゝるへし、

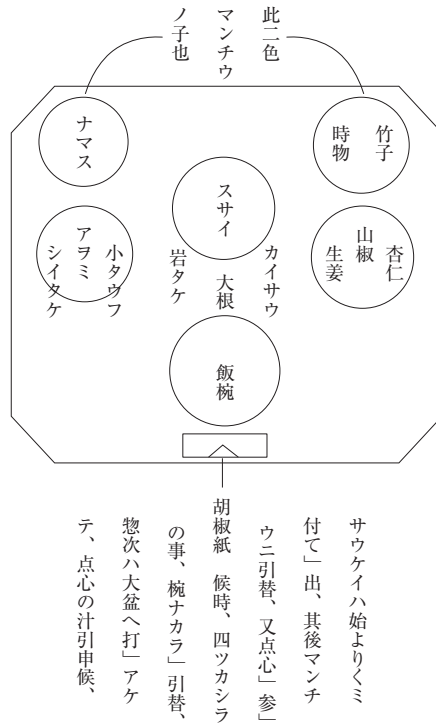
一つりふねハ、四月五月六月のあいひたはかりつる物也、

一銅赤台と云鏡をかくる也、かんやうきうの時焼たる鏡」なり、又栖<sup>本ノマ</sup>か、みなとかくるハ相違也、

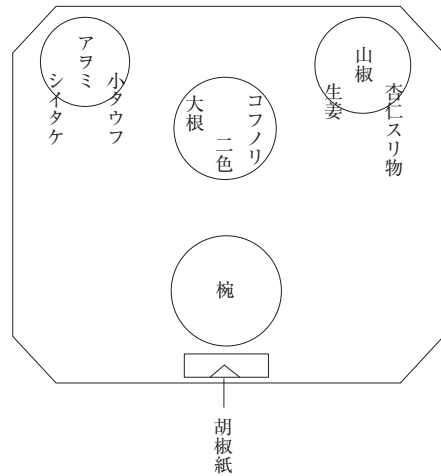
一朝のを煎天と云、昼のを饅美と云、

先一番にさうけいふ、又ハこんにやくちきりて小汁椀に入也、「二

番にまんちう飯の椀に入、汁の椀をふたにして出之、「三番に麦  
 二の  
 おしきにすへ出之、其時饅頭の汁に引替で、」其後点心の汁を引也、  
 是ハまんちう点心の時の事也、「朝のにハさうけいをとり出て、  
 すさいの皿に入、後に又」さうけい椀の中に入へし、是ハさはの心  
 也、点心の時も」同之、何も飯より前の事也、



饅頭過て、二のおしきに麦をてんしん折敷に入出時、饅頭」の汁わ  
 んに取かへ、其時すり物皿を左の青ミの下へやる、「竹子以下の入  
 皿をすさいの下へやる、其跡に麦おしきを」置へし、一番にさうけ  
 い、二番に麦折敷の上に飯椀を」ふたにして出、すり物をあをミの  
 皿の下へやる、すり物の」皿の所へ麦折敷を押やる、



進上	白鳥	一	進上	昆布	一折
晴元			進上		晴元
已上			進上		晴元
一御盃	十荷		一御盃	十荷	
一昆布	一折		一塩引	一折	
一鱒	一折		一鮎斗鮑	一折	
一鰯	一折		一干鯛	一折	
一鶴	一		一雁	一	
一御盃台	二橘		一御盃台	二梅橘	
進上			進上		



貝蛇	一折	白鳥	一
鱒	一折	干鯛	一折
鮒	一折	熨斗蛇	二千本
鮒鮓	一桶	荒卷	十
御樽	十荷	御樽	十荷
以上		以上	
佐々木彈正少弼			
進上	定頼	進上	義賢
雉	一番	一御盃台	二
雁	二	一白鳥	一
鯉	一折	一雁	二
熨斗蛇	千本	一鯛	一折
荒卷	十	一鯉	二尺
御樽	十荷	一海老	一折
以上		一御樽	十荷
佐々木彈正少弼		以上	
進上	定頼		晴元
一白鳥	一		
一雁	二		
一鯉	一		
一鯉	一		
一鯉	一		
一海老	一折		
一炭	十荷		

已上

晴元

一大和侍次第不同

越智伊与守 十市新二郎 古市栖千代 鷹山 藤政 宝来 超昇  
寺孫八郎 楊生新二郎 筒井順政 布施右京進 矢田 万歳 片  
岡 箸尾 高田 岡 吐田<sup>ハシタ</sup> 山田<sup>山田衆</sup> 左川 栖原 福住 井戸 山田  
窪庄 多田 向井 深川 秋篠 辰巳 根尾 龍田 細井戸 豊  
田 菅原 万代<sup>モス</sup> 枺坊

一三職の門前をハ下馬有へし、但當職の時ハ門をひらかれ候間、「其御礼にて候よし申人も候へ共、あかぬ時モ下馬可然候、

一三職へ路次にて馬上にて参会候者、下馬して御礼可申候、「若御らんして馬よりもこしよりも御おり候ハ、参候て御礼を」申、其後御礼ニ可参候、大かた御相伴衆同前、但人により又「相かハるへし、赤松・京極・大内同前、乍去下馬候共、礼ニハまかり」出候間敷候、人により内の人まで使を遣て礼を被申方も」可在之也、

一三職へ礼に参候時、使を給候ニハ、その使の所まで人を遣て「礼を申へし、そのほかの御相伴衆へハ、人により候て、使までも」あるましく候やうによるへし、

一讃岐守殿・山名殿・能登守護殿・一色殿などへは、「書状、人々御中とも可在之、讃岐守殿・山名殿ハ、少賞翫の」様候、謹上も勿論候、謹上書時ハ、いかにも真に可然候、彼「御官も、真に御調可然候、三筑

一伊与河野左京大夫、御相伴衆也、御紋被下之、書札ハ」謹上書たるへし 同

一同河野方へ謹上書たるへし 三向

一筑州より来島出雲守かたへハ、打付書たるへく候、うら書」あるましく候、

一來島かたへハ三向より

来島出雲守殿 日向守長逸

一細川殿年寄衆、大方次第注之、野田上野介跡」麻植 香川 内

藤 波多野 安富 薬師寺与一」秋庭 香西 寺町<sup>但馬石見</sup> 長塩

奈良 若槻

一同供使奏者衆

安富伊豆守 同四郎左衛門尉 同若狭守 同帯刀左衛門尉」内藤

加賀守 同新左衛門尉 大田越前守 高橋五郎左衛門尉」茨木左

衛門尉 富田四郎

朱印

従四位下晴完